
オタリーマンのネギま！生活

アグカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

オタリーマンのネギま！生活

【Nコード】

N3148S

【作者名】

アゲカ

【あらすじ】

オタリーマンのゼロ魔生活、ネギま！編です。恋姫世界に行かなかったと想定して書いております。設定などはゼロ魔生活のものをベースとして、本作独自に設定していきます。決定済みヒロインはエヴァンジェリン一家です。『オリ主最強／キャラ改変／チート／バグ化／独自解釈／原作崩壊／アンチ魔法使い／アンチネギ／』成分を多分に含んでおります。また、幾つかのクロス要素も含まれます。こういった作品が苦手な方はご注意下さいませ。物語の開始はネギが学園に来る前から始まります。利用規約改定に伴い追加、「技

名、魔法名、人物名などに原作となる小説、漫画、ゲームなどから一部お借りしている（転載）部分があります。」

0 時間目：飛ばされる主人公（前書き）

予告どおり投稿いたしました。恋姫に行かなかった場合を想定していますので、プロローグは恋姫とほぼ共通しています。実際の始まりは、次話からとなります。

0 時間目：飛ばされる主人公

ああ、思えばすごい人生だったなあ……

いきなりルイズに召喚されて、いろいろな敵と戦って……

そして、素晴らしい女性達と一緒になれて……

楽しかったなあ……

皆先に逝ってしまったって一人逝くごとに泣いたっけ……

やっと俺も彼女達の所にいけるな……

待たせすぎちゃったからなあ、怒られるかな、はは……

ああ、皆、今、そっちに行くよ……

… 藤崎充、享年九十八歳

… 数々の武勲を立て、また、国の改革に貢献

… 多くの妻を娶り、多くの子をなし幸せな生活を送る

… この世界において、彼の名を知らぬものはいない

…

…

「……こ、ここは……。確か俺は死んだはず……。という事は、ここがあの世って事なのかな……。皆はいるんだろうか？」

辺りを見回すと、真っ白な空間だけが広がっている。

て、ちよつと待てよ、これってまさか……

いやいや、ありえないだろ、俺はすでに死んだんだぞ。

そんな俺がどうしてここにいるんだ……

だめだ、考えてもボヤけて何も分からない……

「俺は、どうしてここに……。それに、体が動かない……。やっぱり死んでるのか、俺は……。」

……ドンッ

現状を把握できず、思考も纏まらない俺の前に突如として出現したもの、それは『扉』……

「……またなのか？ 俺をまたどこかに飛ばすつもりなのか？ 俺はすでに爺さんだぞ、どこかへ行ったとしても、何も出来ないのに……。」

俺がそういうのも構わず、『扉』は開いていく……
問答無用って訳か……

どのみち抵抗も出来ないか……
はあ、やっと皆に会えると思ったんだがな……

…ギイッ
……カッ

扉が開き、光があふれ、俺の意識は遠のいていった……

…

……

ここに、藤崎充の新しい物語が始まりを告げる……
その物語がどういう結末を迎えるのか、今はまだ誰も知らない……

0 時間目：飛ばされる主人公（後書き）

次話から本格的にネギま！世界で活動を開始します。

ネギは割りと直ぐ出ると思いますが、主人公ではありませんので、多分それほど出番は多くならないと思います。
では、次回また、よろしくお願いします。

居残り時間：主人公設定（前書き）

主人公の設定です。一部はゼロ魔や恋姫と共通しておりますが、別物とお考え下さい。

居残り時間：主人公設定

■■■■■■■■■■主人公プロフィール■■■■■■■■■■

名前：藤崎充ふじさきたかし

ハルケギニアでの名前：タカシ・シュヴァリエ・ラ・フジサキ・ド・オルニエール・ル・ブラン・ラ・ライクス・ド・ラ・ヴァリエール

人種：生粋の日本人

見た目：黒髪、黒目、体格は無駄な肉はなく筋肉もしっかり付いている

顔は長年の修行などにより精悍な顔つきに

身長：185.6

体重：81.3

一人称：通常は私。

気分が高まった場合などは俺に変化。

■■■■■■■■■■趣味■■■■■■■■■■

現実世界：オンラインゲーム

二次小説漁り

アニメ鑑賞（萌えより渋いおっさんが出る作品が好き）
パソコン弄り

散歩

ロボット／特撮オタ

エロゲも少々

- ・人間の裏をよく見てきたため、他人をすぐには信用しない
- ・よく言えば慎重、悪く言えば臆病
- ・自分より年下だと孫扱いになり甘くなる事が多い
- ・有事の際は自分が率先して動く
- ・自分の大事な人や物に対して手を出す輩には一片の躊躇もない
- ・ネギま！世界では魔法が存在するので、使用にためらいがない

■ ■ ■ ■ ■ 年齢 ■ ■ ■ ■ ■

ハルケギニアでの年齢：享年九十八歳

ネギま！世界での年齢：24歳

↓ただし記憶や経験などは九十八歳までの物が蓄積されている

■ ■ ■ ■ ■ 家族構成 ■ ■ ■ ■ ■

ハルケギニアでの家族構成：妻六人、子供十八、孫二十六人

ネギま！世界：今の所独り身

■ ■ ■ ■ ■ 頭脳関係 ■ ■ ■ ■ ■

学力：帝王学なども収めたためかなりの学力

経験：学園に存在する魔法使いで勝てる人間なし

大戦時の英雄でもほぼ相手にならず

言語：元々日本人なので日本語は完璧

■ ■ ■ ■ ■ 日常関係 ■ ■ ■ ■ ■

・日中は家の掃除などをしている

↓ たまにチャチャゼロと酒盛りをしている

- ・ 仕事は学園の警備員の仕事をしている
- ・ 学園側に組する考えなし
- ・ あくまで仕事でありそれ以上でもそれ以下でもない
- ・ 基本的に警備の際はエヴァと組む

■■■■■彼女関係■■■■■

ハルケギニア：ハーレム築いたりア充

ネギま！世界：未だ独身

■■■■■ゼロ魔世界における主人公■■■■■

- ・ 各種の戦乱や死亡フラグを叩き折り、妻達と幸せに暮らしていた。
- ・ 数々の武勲などにより、国では英雄扱い。
- ・ 平民を大事にする領主として絶大な人気を誇る。
- ・ 王家も彼には頭が上がらず、ご意見番的な存在。
- ・ 孫には超が千個くらいつくほどに甘い。
- ・ 妻達にベタ惚れで、所構わずのろけることで有名。
- ・ 求婚は多いが最終的に妻は六人で納まった模様。
- ・ 結構子沢山、襲われたため・・・
- ・ 子供にも甘いため妻によく叱られているのが見られていた。
- ・ 街の人たちとも気さくに話すため慕われている。
- ・ 最後は孫や子供達に見送られ息を引き取った。享年九十八歳

■■■■■ネギま！原作知識関連■■■■■

ネギま！世界の魔法をいくつか使用しているため、技や魔法についてはある程度覚えている。

神鳴流はいくつか使用し、自分の技として昇華済み。

きません。

召還可

ド。えものの道具などを直接召還することはで

呪文や技により召還できるものは道具類でも

宝具は王の財宝を経由する物は可。
ゲートオブバビロン

王の財宝の内容物は本作独自設定。

ファが覚醒し、

虚無に関しては、年月の経過の間にルイズやテ

かつ、ジョゼフとも盟友となった為、ほぼ全て

の虚無魔法が

使用可能です。

う名の特訓により

肉体のスペックは長年の義母上による苛めとい

常人を遙かに上回るスペックに。

すでに、肉体的にもチートの域に達している。

その上ガンダールヴを使えば、最早バグと化す。

武術関係も一通り収めている。

特に剣術と槍術、馬術が得意。

なっている。

『技』に関しても結構な数を再現できるように

剣術として神鳴流を体得。

剣術などを使う際は同時にガンダールヴを使用

する為、

本家より強力になっている。

ハルケギニアでは、結構はやっている模様。

能力使用例 1) ドラクエや F F の魔法や技を使う

同時使用不可

をかけておき、

例外として先にFF強化魔法

可能。

DQの攻撃魔法を使うことは

4の能力を

ドラクエ3の能力を使いながら

使うことも不可。

■ ■ ■ ■ ■ 使い魔 ■ ■ ■ ■ ■

- ・ゾディアーク

↓少し成長し言葉遣いが多少変化している

精靈

・
ア
ク
ア

- ・ティエラ

・
フ
ラ
ム

- ・テンペスト

居残り時間：主人公設定（後書き）

今後話が進むにつれ、エヴァから魔法を教わる事もあると思いますので、

能力面で若干の修正が入ると思います。

1 時間目：幼女現る！（前書き）

今回はまだエヴァ一家以外は出ません。
主に状況説明的なお話です。

1 時間目：幼女現る！

……

……

……

う、うう……

こ、ここは一体……

私は確か死んで、その後あの扉にまた吸い込まれて……

駄目だ、その先全く思い出せない……

と、とりあえず、考えてても何もわからないし、周囲を探ってみるか……

キヨロキヨロ……

んん？

なんだここは、ハルケギニアでは見かけない風景だな……

どちらかというと、現実世界の南国リゾートのような感じだな。

それに、あの奥に見えるのは……城か？

結構立派な城だが、ハルケギニアの建築様式とは異なるな。

やっぱりここはハルケギニアじゃなさそうだな。

とりあえず、あの城に向かってみるか……

サクサク……

うゝん、行けども行けども砂浜ばかりだな。
なんだか人のいる気配がしないんだけど……
一体全体何がどうなってるんだ？

……

……

さて、城に着いたはいいいんだが、これまた人の気配がしないな。
一応生活していたような感じはするが、誰もいないのかなあ。
うゝむ、困ったぞ、出来ればここの家主に色々聞きたいんだが。

「おい、貴様」

「オイ、ご主人、コイツダレダ？」

「ん？」

後ろを振り返ると……女の子と人形？

随分可愛らしい女の子だな、人形の方はあれだが……

しかし、この子、どうも普通の人間じゃないっぽいな。

なんというのか、生きている感じがしないというか……

まあいいや、せっかく人に会えたんだし話してみようかな。

「すまない、お嬢さん、出来ればここの家主の方に会わせていただ
きたいのだが……」

「私が家主だ」

「そ、そうだったのか、それは失礼した。私はタカシ・シュヴァリ
エ・ラ・フジサキ・ド・オルニエール・ル・ブラン・ラ・ライクス・

ド・ラ・ヴァリエールと申す。少々困っていて、出来ればお話をさせて頂きたいのだが……」

「……怪しい奴め、私の寢所に勝手に入り込んでおいて無事に帰れると思うなよ」

「オ、殺ルノカヨ、ご主人」

パキイイイン……

「なんだか知らんが、この闇の福音の寢所に忍び込んだ事を後悔して死ね」

「ケケケ、俺二モ殺ラセロ！」

いきなり刃物を向けてくるとは、なんだこの子とこの人形は！
しょうがない、あまり使いたくはないが、状況が状況だし致し方ないか。

「悪いが死ぬ訳にはいかないんでね、『ストップ！』×2」

「な、なんだ、動かんぞ！ おい貴様、何をした！」

「ウゴケネエナ、ケケケ」

「悪いが落ち着いて話をさせて欲しいんだ。勝手に入ったのは謝る。どうも私にも今一状況がつかめていなくてな。」

「マスターお客様でいらっしゃいますか？」

「む、茶々丸か」

「失礼レディ、私はタカシ・シュヴァリエ・ラ・フジサキ・ド・オ

ルニエール・ル・ブラン・ラ・ライクス・ド・ラ・ヴァリエールと申す。少々込み入った事情がありこちらにお邪魔している。申し訳ないが、出来れば落ち着いてお話をさせていただきたいのだが。」

「あ、はい、ご丁寧にも。私は絡繰茶々丸と申します。マスターの従者をしております。」

「こら茶々丸、貴様、何を呑気に！」

「妹よ、ソコハ挨拶スルトコジャネダロ」

「これはこれもどうもご丁寧に。してミス・絡繰、ここは何処なのでしょう？」

「マスターの魔法球の中です」

「魔法球ですか……ふむ、聞いた事のないマジックアイテムですな」「こら、私を無視するな！」

ふむ、どうやら魔法体系なんかも随分と違うみたいだな。つか、魔法がある世界だとは驚いたな。

ならば私の能力もある程度は融通が利くかもしれんな。

「おい、貴様、私を無視するとは……」

「あ、ああ、すまんすまん、『エスナ』！」

「オイオイ、俺もワスレルナヨ」

「おつとすまん、『エスナ』」

「……なんなんだ、貴様の魔法は、見た事ないぞ」

「それを言うなら、この魔法球とやらも私は見た事ないぞ」

「大体だな、貴様一体どこから入った？　ここは私の承認を受けた者しか入れないはずなんだぞ！」

「それなんだが、少々長くなるがいいかね？」

「早く話せ！」

そうして、この幼女もとい少女に私の今の状況を話した。

まあ、案の定信用していなかったが、私の使う魔法やその他ハルケギニアに関する事などを当たり障りない部分で説明したところ、一応は納得してくれたようだ。

全部は説明していないがね、特に使い魔のルーンの部分については色々と面倒だからな。

「とまあ、こういう訳なのさ」

「なんなのだ、そのとんでもない世界は……」

「ケケケ、殺し合いが出来るルナンテ、イイ世界じゃネエカ」

「私はしたくは無いがな」

「しかし、貴様が見せた魔法はどれもこの世界の魔法とは違うからな……」

「そうだな」

他にもまだまだ色々あるんだが、まあ、あえて手の内を見せる必要はないだろう。

まだこの子も信用出来る訳ではないからな。

ザザザザ……

「む、何だ?!」

「ナンダ？」

「これはもしかして……」

ザアアア！

「やっぱりアクアか！」

『久しいな、また会えて嬉しいぞ、タカシよ』

ゴゴゴ……

「今度は何だ？！」

「もしかして……」

ドガアアアアン！

「妾もいるのじゃ！」

「ティエラ！」

「お姉さんもいるわよ」

ボウウウウ！

「フラムもか、てことは……」

「私もいるよー！！」

ゴウウウウウ！

「うわっ！」

「オワッ！」

「きゃ」

「テンペスト！」

「やつほく久しぶり久しぶり久しぶり……！」

「はは、相変わらずだな皆」

なんとまあ、四大精霊が全員現れたよ、どうなってんだ？
まあいいか、久しぶりに皆と会えて私も嬉しいしな。

「……おい、なんなんだそいつらは！ 精霊神クラスじゃないか！」

「ああ、紹介しておこう。水の精霊のアクア。」

「アクアだ」

「土の精霊のティエラ」

「妾はティエラじゃ！」

「火の精霊のフラム」

「フラムよ、よろしくね、お嬢ちゃん♪」

「風の精霊のテンペスト」

「テンペストだよ……！」

「全員私の盟友だよ」

「……精霊神が盟友って、お前一体何者だ」

「何者といわれてもなあ……。しかし、どうして皆もここに
いるんだ？」

「わからん、我らもなぜここへ来たのかは……」

「それに妾たちだけではないぞえ」

「どういう事だ？」

「ゾディアークちゃんやイクシオンなんかも来てるわよ」

「マジ？」

「マジだよ！ 喚び出してみたら？」

「ふむ……おい、ゾディアークゝいたら返事してくれゝ」

……

……

「（主 会いたかった）」

「お、本当にいたよ、で、どこにいるんだ？」

「（空）」

「空の上か、なあ、どうしてお前もどうしてこっちの世界にいるんだ？」

「（不明）」

「お前でもわからないのか……」

「（主 我 契約）」

「ああ、使い魔の契約か？ まだ有効なのか？」

「（有効）」

「そっか、んじゃまた長い付き合いになるだろうけどよろしくな」

「（了 我 主 好）」

「はは、私もだよ、じゃあまた後でな」

「（了）」

ふむ、ゾディアークまで来てたのか。

そうになると、召喚獣とかも全部来てるっばいな。

まあ、この世界でゾディアークの力が必要になるかよくわからんけどな。

「おい、貴様今誰と話してたんだ？」

「ああ、私の使い魔のゾディアークとね。どうやら上空にいるらしい、まあ、何時も通りだが。」

「使い魔？」

「そうだ」

「……益々訳が分からん」

「それとだな、お嬢さんの名前を教えて欲しいのだが」

「ふん、いいだろう、名乗られたら名乗るのが礼儀だからな。私はエヴァンジェリン・A・K・マクダウエル、世間では闇の福音と呼ばれている。」

「俺ハチャチャゼロダ」

「そうか、ちなみにA・Kの部分って、宣誓名か何かかい？」

「……そうだ」

「どんな名前なんだ？」

「……アタナシア・キティだ」

「可愛い名前だな」

「……ふん」

「タカシよ」

「何だ、アクア」

「この単なる者は人ではない、吸血鬼だ」

「そうだったのか、ならエルザと同じか」

「そうだ」

「ふん、吸血鬼と聞いて驚いたか？」

「いや、全く。驚く要素がどこにもない、むしろ可愛いお嬢さんと思えないな。」

「なっ?!」

大体この子のどこに恐れろと……

胸はぺったんこだし、背丈もちっこいし、着ている服はゴスロリだしさ。

こんなんで恐れると言われてもなあ……
逆に微笑ましさをすら感じるわ。

『お姉さんとしては、微笑ましいくらいねえ』

「全く同意見だ、どう見てもお嬢ちゃんにしか見えん」

「き、貴様……！」

『それにのうタカシよ、この者、呪いを受けておるぞ』

「呪い？ 本当か？」

『そうだね！』

「ふむ、解呪は可能だろうか？」

『タカシの力なら、簡単に解呪出来る』

「な、なんと、呪いを解けるのか？！」

「まあ、アクアが言うなら間違いないだろうな」

「い、今すぐ解け、今すぐだ！」

「まあまあ、落ち着け。呪いを受けた経緯も分からずに解く訳にも
いかなだろう。ちゃんとその辺りの話を聞いてから判断させて貰う。」

「……いいだろう」

そうして、エヴァンジェリンより呪いにまつわる話に加え自分がどうして吸血鬼になったかも話し始めた。

吸血鬼の話に関しては、彼女にも罪はある。

どんな理由であれ、人を殺せば罪だ。

まあ、私も同じだが……

とはいえ、彼女はその事を悔いて生きてきているのだろう。

六百年もの間、孤独に耐えて生きてきたのだ、もう許されてもいい

だろうと私は思う。

しかし、呪いの話は本当にもう呆れるばかりだ……
どうしてこう正義を自称するバカ共はバカなんだろうな。
全く、嫌気がさして来る。

それと彼女の話の中で出てきた用語などからすると、ここは現実世界にあった『ネギま!』の世界のようだ と推察できるが……
正義バカ共が闊歩する世界なんて、私が一番嫌う世界ではないか……
そのうえ、なんだかバカげた騒乱に巻き込まれる可能性すらあるようだし……

全く、どうしてこう次から次へと……

「こつこつ訳だ」

「ふむ、まあ吸血鬼になった後の事に関しては君にも罪はあるな。
どうという理由であれ人を殺せば罪だ、それは免れない。とはいえ、
もう許されてもいいだろうと私個人は思うがね。」

「……」

「それと、サウザンドマスターだったか、そいつは大バカ者だな」
「そうだな、バカだ、大ばか者だ……」

恐らく彼女はサウザンドマスターとやらに惚れていたのだろう。

全く、好意を寄せてくれている相手に呪いを掛けたうえに、勝手に
放置するとは……

男としてクズ以下だな。

「やれやれ、自分に思いを寄せている女性を放置して死ぬとは……
それに、三年の約束すら守らないとは、男として恥ずべき行為だ。」

「……もう、奴の事は諦めているさ」

「しかしだな、幾ら天才と言われたそいつが掛けた呪いとはいえ、複数の術者なりで時間を掛ければ解呪は出来るだろう？　なぜ三年の約束を放置してそのままなんだ？」

「魔法使い共にとってその方が都合がいいからさ。結局、なんだかんだと言って分かりやすい悪が欲しいのさ、正義バカ共はな。」

「なるほど、どこの世界でも正義を自称するバカ共は始末に負えない」

『全くだな』

『本当ねえ……』

『やれやれじゃな』

『バカだよねえ』

結局のところ、この子も昔のルイズやジョゼフのような被害者という訳か……

どうしてこう、世界というのは集団苛めが好きなのかね。やれやれ、どこへ行っても人間は変わらないな。

「よし！　ならば君の呪いは私が解こう！」

「本当にいいのか？　先ほどはああ言ったが、勝手にそんな事をすれば正義バカの魔法使い共から狙われる事になるぞ？」

「たかがその程度、義母上を相手にする事に比べればなんて事はない。それに喧嘩を売って来るのなら買うまでだ。」

『我らもいるのでな』

『そうねえ』

『タカシに手を出すなら、陸ごと沈めてやろうぞ!』

『台風で吹き飛ばしてあげるよ!』

「とまあ、私には頼もしい味方もいるのでな。では先ずは呪いの構成を調べよう……『ライブラ』!」

ふむふむ……呪いの内容からすると、力任せに押さえつけてるだけか。

術式もぐちゃぐちゃだ。

その上、登校を繰り返すなんて妙な術式を組み込んでるから余計にややこしくなってるな。

はあ、これを掛けた奴は余程の大バカ者が未熟者だな。

「……どうなんだ」

「解析は完了、直ぐにも解けるな。というかだな、これを掛けた者は、大バカ者が未熟者だな。全くこのような未熟者が力を振るうとは情けない。この世界の魔法使いとやらは、余程の愚か者が多いよ。うだな。まあいい、さっさと解呪を済ませよう……彼の者を呪いより解き放て『シャナク』!」

カツ!

「うう!」

「ご主人!」

「マスター!」

「大丈夫、今呪いが解けて本来の力が戻り始めてる。それで体が少しびっくりしているだけだ。」

……

……………

「……はあはあ、こ、こんなにきついとは」

「呪いからの解放っていうのは、そうだったものだ。で、どうだ、呪いから解放された気分は？」

「……ああ、なんとも清々しい気分だ。こんな気分になったのは、随分と久しぶりだ。」

「そうか、それは何よりだな」

「礼を言う」

「構わんよ」

「ご主人ノ呪イガトケタナラ、俺モ好きニ動ケルツテ事ダヨナ？」

「そうだな、チャチャゼロ」

「おめでとうございます、マスター」

「ああ……」

嬉しそうではあるけど、少し寂しい感じだな。
長年あったものがなくなっただけなら、喪失感とでも呼べばいいのかね。

まあ、これからは自由に生きられるだろう。
とはいえ、彼女も人を殺すという罪を犯している以上は、今までよ

りもより一層気を引きしめて生きて貰わないとな。

まあ、彼女の罪を誰も許さないなら、私が許してやればいい。

誰かが許さなければ、罪なんて終わらないってよくわかったからな。

《《《エヴァ Side》》》

まさか、長年追求めた解呪がこうもあっさり終わるとはな……

それにこいつは他の連中のように、私を恐れない。

もしかしたら、私はこういった奴を求めていたのかもしれない……

ふ……まあいい、今度こそ本当にさようならだ、サウザンドマスタ

！……

《《《Side Out》》》

にしてもだ、六百年も生きたのにこの見た目は少し可愛そうかもしれない。

彼女も女性だし、やっぱりより美しくなりたいたろう。

少し試してみるか、エルザでは上手くいったしな。

「あゝエヴァンジェリン？」

「……エヴァでいい」

「そうか、では私の事もタカシでいいからな？　チャチャゼロや茶々丸さんも同様だ。」

「オ、ソウカ、ソウサセテモラウゼ」

「はい、畏まりました」

「でだな、エヴァ、唐突ですまないが成長してみたくないか？」

「……それは流石に無理だ、吸血鬼は不死だからな、成長は出来ん」

「それがだな、吸血鬼でも成長する方法があるんだ。どうだ、騙されたと思って試してみないか？」

「……まあ、お前のいう事なら」
「よし、それじゃやるぞ！」『サンス・オブ・タイム』！！」

シュワッ！

「きゃ！」

ふむ、どうやら上手くいったな……
しかし、服装が不味いな、後ろ向いところ。
流石にレディの裸をじっくり見るわけにはいかんからな。

「茶々丸さん、すまないがエヴァに何か着る物を用意してあげてくれ。多分、サイズ合っていないはずだからな。」

「畏まりました、少々お待ちを」

「アクア、どうだ、エヴァは成長してるか？」

「うむ、問題なく成長している」

「……視点が高い、それに手足も長い……ほ、本当に成長したのか？」

「そうねえ、大分成長したわよ」♪『

「むう、また胸が大きいのじゃ」

「そうだよねえ、タカシって胸大きいのが好きだし」♪『

「うおい、さらっと何を言うか、テンペスト！」

「へへ！」

全く、そりゃ確かに胸は大きいのが隙だが、別段それだけでは……
あ、エレンさんにルイズさんじゃありませんか♪

あらま、義母上まで一緒になって、え、あの、その……すんません
つしたあー！！

……

……

はっ！

し、しまった、義母上達の幻影を見てしまった……

死してなおお仕置きに来るとは、恐るべし、ヴァリエール家の女！

「マスターお召し物です」

「う、うむ……」

「それと、こちらを」

「ああ……」

姿見か、茶々丸さん用意いいな、流石はメイドさんだな。

そういえば、リーゼさんたちメイドさん達も結局最後の最後まで若
様って口癖が抜けなかったな。

あの人達も凄くいい人達だったからなあ……

まあ、時折暴走してたがな。

「こ、これが私……」

「ほ、随分と美人だな」

「ば、ばか！ からかうな……」

「からかつてはいない、私の本心だ」

「うう……」

「ふふ、随分とこういった事には弱いようだな、可愛いものだ」

「う、うるさいうるさいうるさい……」

ははは、なんだかルイズを思い出すな。
あいつもなんだかんだで、いい女性になったからなあ……
まあ、甘えん坊なのは治らなかったがな♪

『ルイズに似ているな』

「そうだろう、私もそう思ってた」

『エレンとも似ておるしのう♪』

「ああ、なんだか二人がいるみたいだ」

『ふふ、そうね♪』

『ルイズも可愛かったもんね!』

「全くだ」

「……そのルイズというのは？」

「私の妻の一人さ」

「そうか……あの、今でもその妻を……」

「ああ、妻達の事は今でも愛しているよ。きっと忘れる事なんて出来ないだろう。」

「そうか……」

とりあえずこれで彼女の救済も終わったな。

まあ、これから先色々大変だろうけど、頑張って貰いたいものだ。

「さてと、君の呪い解除なども終わったし、私はどうするかな」

「そういえば、タカシは行く場所がないんだったな」

「ああ、身分証とかもないからな、どうしたものか……」

「……なら、私の家で暮らせばいい、部屋なら余ってるからな」

「おいおい、幾らなんでもそれは無理だろう。見知らぬ男を住まわせるなど……」

「い、いいんだ、お前ならな……」

「ふむ……」

まあ、確かに行く場所もないし有難いと言えは有難いのだが……
しかしなあ、女性の家に転がり込むのは少々気が引けるのだが。
うゝむ、どうしたものかなあ……

「礼だと思ってくれればいい、私にとっては成長するのは長年の夢
だったからな。それをかなえてくれたのだ、礼をせねば私の沽券に
関わる。」

「まあ、そこまで言うならお世話になるとしようか」
「そうか！」

「オ、ナラヨ、俺トモ戦ッテクレヨ」

「暇なときにでもな」

「オッシャ！」

やれやれ、なんだか大変な事になってきたものだな。

とはいえ、彼女もまあ悪い子ではないし、楽しくはなりそうだ。
チャチャゼロや茶々丸さんもいるから飽きる事はないだろうし。
さて、これからどうなるのかねえ。

1 時間目：幼女現る！（後書き）

というわけで、一話目でした。なるべく外伝に沿ったつもりです。なお、アクア達は出そうかどうか迷ったのですが、ネギま！の世界でも精霊は存在する事ですし、アクア達をゼ口魔だけで終わらせるのは勿体無いと思い出演させました。恋姫の方は、アクア達は出演しません、後々その辺りの理由も描くつもりです。

では、また、次の時間で！

2 時間目：妖怪現る！（前書き）

今回は学園でのお話です。まあ、こちらも外伝に沿うような形にしますが、もう少し掘り下げていきたいと思います。

2時間目：妖怪現る！

やあ、タカシ・シュヴァリエ・ラ・フジサキ・ド・オルニエール・ル・ブラン・ラ・ライクス・ド・ラ・ヴァリエール改め、藤崎充だ。ハルケギニアでの名は長すぎるので、元の日本人名である『藤崎充』を名乗る事にした。

あれからもエヴァといくつか話し合い、その結果やはりこの世界が『ネギま！』の世界である事が確定された。

というのも、俺が使っている剣技やいくつかの魔法の存在があったからだ。

まあ、俺もあの剣技、神鳴流を使っていたからネギま！の事は覚えていたが、あいにく技や魔法の一部と主要な用語を覚えているだけで、人物などは覚えていない。

なので、エヴァの事も覚えていなかった訳だ。

とはいえ、数日過ごして分かったが、エヴァはかなりの甘えん坊だと判明した。

なんというのか、呪いの事や諦めていた成長の夢が叶い、今まで強靱な精神力で抑えて来たのであるう本性がむき出しになったようだ。そのせいか、事あるごとにくっついて来るんだよな。

まあ、彼女は今まで人に甘えるなんて出来なかったのだろうから、俺としては構わないのだが、表でおもいきりベタつくのは勘弁して欲しい。

エヴァは見た目は物凄く美人なんだから、激しく注目されてしまうのがな……

「あんな、エヴァ」

「なんだ？」

「いい加減離してくれんか」

「いいじゃないか」

「いや、俺が妻子持ちだと知っているだろうに……」

「でも、奥方はもういないのだろう？　なら、構わんだろう」

「いや、そうでなくてだな……」

「ふふ、いいじゃないか、こんな美人と一緒に居られて男冥利に尽きるだろう？」

「まあ、それは否定せんが」

「ふふ、なら問題はないな」

なんというのか、随分と刺々しさが無くなったものだ。

まあ、きつと本来の彼女はこういった明るい性格なんだろう。

それが正義バカ共のせいで、捻じ曲げられてしまったのだろうな。全く、嘆かわしいものだ……

「でだ、エヴァ」

「ん？」

「これから何処に向かうのだ？」

「ああ、この学園の学園長のところだ」

「学園長？」

「ああ、タカシの戸籍や身分証の発行についてな」

「ふむ……」

学園長とやらはそれほど権限を持っているのか？

普通身分証明とか戸籍となると、国家が管理すべきものだと思うのだがなあ……

いくら広大な敷地を持つ学園の長とはいえ、そこまで出来るとは思えんのだが。

「まあ、任せておいてくれ」

「エヴァがそういうなら任せよう」

「ふふ」

「やれやれ、随分と初回と印象が変わったなエヴァ」

「そうか？」

「ああ、随分と刺々しさが無くなったよ。まあ、今のままの方がより可愛いと思うがな。」

「……！ も、もう、またそうやって……」

「ははは、さっきのお返しだ」

本当に照れてるときは、エレンやルイズに似ているな。

エレンやルイズ相手にも、よくこうしてからかったな。

まあ、その度に顔真っ赤にしたから可愛くてしかたなかったけ。有名だったもんなあ、バカップルって。

よくギーシュやジョゼフに言われたものだ。

……

……

■■■■■■■■■■学園長室■■■■■■■■■■

「爺、入るぞ」

「エヴァか、ええぞ」

ギイ……

「ほ、なんじゃ、年齢詐称薬でも使ったのかの？」

「その事も含めて少し話があつてな」

「ふむ……それと、後ろの御仁はどなたかの」

「これは失礼した学園長殿。私は藤崎充と申す。諸事情があり、エヴァの家に厄介になつてゐる。」

「そうか、わしは近衛近右衛門、この麻帆良学園の理事長を務めておる。してエヴァよ、話とは藤崎殿も関わるのかね？」

「ああ、というよりもタカシが話の中心だ」

「ふむ、わかつたぞい」

「では、防諜措置をしよう『サイレント』！」

サアア……

「これで外部に音声は漏れない」

「相変わらずタカシの魔法は万能だな」

「そうでもないぞ」

「……魔法使いなのかね？」

「私は魔法使いではない。ただ、魔法を使えるというだけだ。」

「ふむ、詳しく聞かせて貰おうかの」

「ああ、実はな……」

こうしてエヴァが俺の事、呪いの解呪の事、成長した事を学園長に説明。

その間、学園長は頭を抱えていたが。

まあ、どうせ、エヴァの呪いを解いた事だろうな。

私としては間違つた事はしていないと考えているので、謝罪するつ

もりもないがな。

「な、なんちゅー事をしてくれたんじゃ……」

「何か問題があたりで？」

「大有りじゃ！ 勝手に呪いを解くなど！」

「呪いは三年の約束なのだろう、なら問題はなかるう」

「それはそうじゃが……しかしじゃな！」

「なぜそうまで彼女の呪いに拘るのだ？」

「それはじゃな……」

「それは？」

「……」

話せないか。

まあ、そうだろうとは思ったがな。

大方、吸血鬼という目に見える悪が居れば、魔法使い共の意識コントロールがしやすいといったところだろう？

それにどうもこの学園、妙な結界が張ってあるらしく、その結界への魔力供給がどうもエヴァからいつているらしいのだ。

という事は、エヴァをここに縛りつけ魔力タンクの代わりにしていたのだろう。

全く、どうしようもないな。

「……」

「どうしたのかね、説明出来ない理由でもあるのかね？」

「……」

「大方あれだろう、吸血鬼のような悪が居ればそれだけハケ口が出来るとの事だろう。それに、どうもこの学園の結界はエヴァの魔力を一部使っているようだからな。魔力タンク代わりにでもしていたのだろう？」

「本当なのか、タカシ？」

「ああ、精霊達が調べてくれたからな。大気中や大地を流れる力の流れが、エヴァから来ているとな」

「……」

「答えられんか。全く、どこの世界も正義を自称する愚か者共は始末に負えん」

「……随分というのう」

「当然だ、私はそういった正義を自称する愚か者共とは幾度も矛を交えているのでな。勿論、最終的には盟友や親友と共に徹底的に殲滅しつつしたがな。」

「そうなのか？」

「ああ」

あの戦は本当に大変だったな。

なんせ、ロマリアの神官や教会騎士など全てが相手だったからな。まあ、最終的には聖エイジス32世とジュリオ・チェザーレを処刑して終わったがな。

その後のロマリアは、少しずつマシにはなったが……

「しかしじゃの、こんな勝手な事をすれば本国から逮捕状が出るぞ！」

「本国とは魔法世界の事か？」

「……そうじゃ」

「何か勘違いをしていないか？ 私は魔法世界の組織の人間でもな

い、そもそもこの世界の組織に属してなどいない。その私が人助けの為に呪いを解く行為がなぜ犯罪になるのだ？」

「……」

「勝手に人を犯罪者扱いしないで貰おうか。まあ、来るなら来ればいい、十二分に抵抗はさせて貰う。」

「やめておけ爺、こいつは精霊神と呼べるような存在を味方につけているのだぞ」

「……なんじゃと」

「ふむ、ならば紹介しておこうか、アクア、ティエラ、フラム、テンペスト、すまないが出てきてくれるか。」

『呼んだか、タカシ』

『呼んだかえ』

『あらどうしたのかしら？』

『何々?!』

「これが、それぞれ水の精霊、土の精霊、火の精霊、風の精霊だ」

「……なんじゃこ奴らは……」

「驚くのも無理はないな、なにせ霊格が古龍などより遙かに上だからな。人間なんぞ足元にも及ばん。タカシに手を出せば、こいつら全てを敵に回す事になるぞ。」

「ちなみに私にはもう一人強力な使い魔がいる。あれを怒らせればこの学園程度なら瞬時に消えるぞ。」

「……一体何者なのじゃ、お主は」

「何、ただのお人好しだ」

「ふふ、それも重度のな」

やっぱりこの手の手合いは、こちらの戦力を分かせ黙らせるのが一番いいな。

というか、勝手に人を犯罪者にしないで貰いたいものだ。

エヴァの呪いを解く事のどこが犯罪だというのか……

全く、どうにもこうにも、嫌気がさしてくるな。

「爺、タカシは今戸籍や身分証がない」

「話を聞く限りではそうじゃろうな」

「こいつの能力は精霊神を味方に付けている事からもわかるだろう。なのでこいつを学園の警備員として雇う代わりに戸籍などを用意して貰いたい。」

「……」

「警備員？」

「ああ、この学園は色々と問題が多くてな」

「ふむ、学園中心の力の事と、さきほど校舎の中にいた力の持ち主についてかね？」

「それもあるが、貴重な魔道書などもあるのでな」

「なるほど、それらを狙う輩から守れと」

「そういう事だ」

「別に構わんが」

「……随分あっさりしておるの」

「単なる仕事だろう？ 別段仕事を選び好みするつもりはないさ」

「どうだ、腕については私が保証しよう。この闇の福音がな。」

「むっ……」

さて、どう出るかな？

まあ、別段戸籍とか用意して貰わずとも、非合法な方法であればなんとかなるだろう。

ネギま！の世界は現代社会に近いからな、金を積めば戸籍も手に入ってしまう。

いい事では無いのは勿論承知しているが、今の状況では致し方あるまい。

「……いいじやろう、ただし、試験をさせて貰う」

「試験？」

「うむ、今日の夜十時に世界樹広場に来るのじゃ、そこで試験を受けて貰う」

「誰かと模擬戦かね？」

「そうじゃ」

「わかった」

「では、戻ろうか、タカシ」

「ああ、そうだな。それと学園長殿。」

「なんじゃ」

「約束はお忘れ無きように……」

「……わかっておるわ」

ふむ、まあ、成果は上々といったところか。

恐らく学園内でも屈指の強者を出してくるのだろう。

とはいえ、負けるつもりは微塵もないが。

何せ、義母上とエレンとカトレアとマチルダを一度に相手にするよりは大分楽だろうさ。

あの四人を一度に相手したときは、本当に生きた心地がなかったからな……

今思い出しても震えが止まらない……

……

……

■■■■■エヴァンジェリン宅■■■■■

「オウ、早カッタジャネエカ」

「ああ」

「デ、ドウダツタンダヨ」

「上々といったところかな」

「ホウ」

「それよりもどうだチャチャゼロ、少し付き合わないか」

「オ、イイゼ」

「何だ、やるのか？」

「ああ、少しウォーミングアップをな」

「ふふ、まあ、負けるとは思っていないがな」

「当然だ」

「オイ、早く殺口ウゼ！」

「わかったわかった、そう焦るな」

さてと、久々に剣を使うとするか。

ギーシュと共に作成した業物だからな。

あいつも、最終的にはスクウェアまで到達したからなあ。

そのうえ、あいつのワルキューレはほとんど芸術の域にまで達したからな。

ワルキューレが戦う戦場は、一種の舞台とまで言われたくらいだからなあ。

■■■■■魔法球内部■■■■■

では、そろそろ出すとするか。
王の財宝を開いてと……お、あつたあつた。
宝具と比べればあれだが、切れ味や剛性などはそんじょそこらの剣
なぞ問題にならんからな。
まあ、この剣を持っているのは私とギーシュとジョゼフだけだが……

「おい、今のはなんだ？」
「まあ、個人倉庫のようなものだ」
「オイ、ソノ剣見セロ」
「ああ、構わんぞ」
「……スゲー業物ダナ」
「お、分かるか？」
「アア、見タ事ネエゼ、コンナ業物」
「それは俺の親友と共に打った剣でな。世界に三本しかない。」
「余程ノ名工ダナ、ソイツハ」
「ああ、そうだ、チャチャゼロはナイフを使うよな？」
「アア」
「なら、俺の親友が打ったナイフがあるが、いるか？」
「イイノカ?!」

「ああ、使われずに仕舞われているより、その方がナイフも幸せだ
ろつ。待ってくれ、今出すからな……。」

え〜と、あつたあつたこれだこれ。
地球製のナイフについて話したときに、ギーシュの奴が作ったんだ
よな。

まあ私は基本的にナイフは使わなかったからな。
ジョゼフはよく加速と組み合わせて使っていたな、ロマリア戦でも
無双してたからなあ。

「これだ」

「……コレモスゲエナ」

「チャチャゼロだけずるい……」

「わかったわかった、エヴァには俺の手作りで何か細工を送ろう。
しかし、エヴァは吸血鬼なのだし、銀は危険ではないのか？」

「別段問題ない、真祖だからな」

「ふむ、ならば得意の銀細工を贈るとしよう」

「た、楽しみだ……」

「ああ、よい物を贈らせて貰うよ。さてチャチャゼロ、殺ろうか。」
「オウヨ！」

やはりチャチャゼロは強いな、こうして仕合っていると面白い。
ハルケギニアには、なかなか剣士で強いのがいなかったからな。
まあ、ジョゼフは別だがな、あれはもう本当に別格の才能だ。
よく二人で仕合ったものだな。

……
……

さて、そろそろ十時か。
まあ、煩い連中が多いのだろうな。
あまり刺激しすぎないように自重しておかねばな。

……
……

■■■■■世界樹広場■■■■■

ここが試験の場所か。
内容としては模擬戦との事だが、エヴァの話では学園でもトップの
実力者が来るそうだな。
まあ、それはそれでなかなか面白いだろう。
と、いかんいかん、最近どうも義母上に似てきた気がするな。
自重せねば。

「来たようだ」
「ふむ、見物人もいる訳か、まるで公開処刑だな」
「かもしれんぞ」
「まあ、大丈夫だろうさ」
「では、そろそろ始めようかの」
「あの、学園長」
「なんじゃね、ガンドルフィー二君」
「あの男性が今回の試験の？」
「うむ」
「それと、その隣にいる女性は？」
「……エヴァンジェリン・A・K・マクダウェルじゃ」

「「「「「な?!」「」「」」」」」

「どうも、彼が呪いを解いたそうだな」

「な、なんという事を！ おい、貴様！」

ん、なんだか吠えてるな。

煩い奴だな……

「何か用か？」

「なんて真似をしてくれたんだ！ エヴァンジェリンの呪いを解くなど！」

「呪いは三年の約束なのだろう、ならば何も問題は無い」

「何を言う、そいつは極悪人なんだぞ！」

「だからどうした？」

「貴様は、我ら正義に弓を引くつもりか！」

…… 呆れて物も言えん。

こんなバカ共を飼っているのか、この学園は……

教師がこの体たらくでは、この学園の程度も知れるというものだ。コルベールさんやオールド・オスマンを見習って欲しいものだ。

「貴様らが正義かどうかなど、私にはどうでもいい事だ。さ、試験をさっさと始めてくれんかね。」

「さて、まだ話は！」

「黙れ、小僧！ それ以上口を開けば、今すぐにでも消すぞ……」

全く、聞くに堪えん……

こんなバカがいるとは、この学園も長くはないな。やれやれだ。

「き、貴様ー！」

チャ！

「抜いたな……」

「ああ、抜いた……」

「では、問題ないな、殺らせて貰おうか『加速』！」

ポンポン……

「どこを見ているのかね？」

「な？！」

「フッ！」

ボグウッ！

「ぐふっ！」

ドサッ……

「全く、小うるさい小僧だ。さ、学園長殿、早く試験を始めましょうか。」

「う、うむ……」

やれやれ、全くどうしてこうなんだ。

正義を自称するのはいいし、正義の為に何かしようという志は非常に立派だと思うが、その為に何をしてもいい訳ではないだろうに。もっと、正義というものがどういふものかしっかり考えて欲しいものだな。

あの坊やもまだ若いのだから、まだまだ考えを治す時間はあるだろう。

「で、では、試験を行うとしよう。高畑君。」

「はい、学園長」

「ほう、君が私の相手かね」

「そうなるね……」

「ふむ、まあ、そこそこやるようではあるな。うちの領地の……部隊長クラスかな」

「おいおい、あいつはこの学園でも爺に次ぐ実力者だぞ」

「ふむ、とはいえ私からすればそれほどでも無いよ」

「随分と余裕ありだね」

「当然だ、君とでは年季が違うのでな。さ、おしゃべりは終わりだ、さっさと始めようか。」

一撃で終わらせてもいいんだが、どうするべきかな。

まあ、圧倒的实力差を見せ付けておく方が、後々突っかってくる奴も少ないだろうし、彼には申し訳ないが、人身御供になっていたどうか。

「で、では、試験……始めい！」

……

……

「じゃあ、いくよ！」『剛殺！居合い拳』」

ゴウッ！

ドガアアアアン！

「……終わったかの」

パラパラ……

「……すまん、何かしたかね？」

「ぬ？」

「避けましたか」

「別段避けてなどおらんよ、防御魔法を使ってただ立っただけだ。ほら、遠慮せず打ち込んできなさい。」

「……そうさせて貰いますよ！」

ドガァ！……ドガァ！……ドガァン！

「くっ！」

「ふむ、まああの威力ではあるが、まだまだ足りんな」

「……自信なくしますね」

「まあ、君が弱い訳ではないよ。ただ、私が強くなりすぎただけだ、なんせ義母上の特訓は地獄だったのな。この程度防げないようでは、今頃私は墓の中だ。さて、ではこちらにも反撃させていたどうかね。『ユビキタス・デル・ウインデ』！」

パシユン！

「分身ですか」

「……分身とはまたちょっと違うがね。まあ、話してもわからんだろうから、終わらせていただくよ、『カッタートルネード』！」
「「「「

ガガガガガガ！×5

「くう……うわああああ……」

ドガアアアアアアン！×5

パラパラパラ……

「……ふむ、死んだかな？」「……」

「お、おい、今のなんだ……」

「……ああ、風属性の魔法だ。と、偏在解除つと」「……」

ふむ、少しやりすぎてしまっただろうか？

義母上の十八番をやってみたが、これは威力がでかすぎるな。

手加減したつもりだったのだが……

まあ、いいか。

「さて、学園長殿、相手は戦闘不能のようですが、相手を変えてまだ続けますか？」

「……いや、もういいわい、合格じゃ」

「では、お約束の品、お忘れなきように」

「わかっておるわ！」

「エヴァ、戻ろうか」

「……あ、ああ。しかし……広場が壊滅してるんだが……。」

「本気でやったらこの程度ではすまんよ」

さてと、これで戸籍などは手に入る訳か。

まあ、仕事の方は適度にやっておけば問題なかつた。

別段命を掛けるほどではないからな。

……
……

■ ■ ■ ■ ■ エヴァンジェリン宅 ■ ■ ■ ■ ■

やれやれ、なんだかここに来てまだ数日なのに大分疲れたな。
もっとうこう穏やかに生活させて欲しいものだ。

「ただいま」

「オウ、早カッタジャネエカ」

「ああ、割とすぐ終わったよ」

まあ、あの高畑という青年は、なかなか見所があるな。

もう少し鍛えれば、中隊長クラスまではいけるだろうな。

「ドウダツタンダ？」

「どうとは？」

「相手はタカミチダツタンダロウ？」

「そのようだな」

「強カッタノカヨ？」

「まあ、そこそこだな。まだまだ鍛える余地はある。」

「ハハハ、タカミチ相手にソレカヨ！ シカシ、ナンドカ爺ミタイ
ダナ」

「まあ、実年齢は九十八歳だからな」

「ソウナノカ？」

「ああ、なのでどうも若いのを見ると説教臭くなってしまっ

そうなんだよなあ、どうも五十超えた辺りから説教臭くなってしま
って……

いかななあ、もっとこう見た目に即したフレッシュな感じにならねば！

こんな事を考える時点で年食ったと言ってる様なものだが……

「なあ、タカシ」

「どうした、エヴァ」

「……お前は後悔していないのか？」

「何がだ？」

「私の呪いを解いた事だ」

「……なぜ後悔する必要がある？」

「だって、私の呪いを解いたからお前は！」

「ああ、あの正義バカの事を言ってるのか？」

「……コク」

「別にエヴァが気にする事じゃない。私がそうしたいからしたまでだ。私は自分の行動に後悔など微塵もないさ。」

「でも……」

「大丈夫だ、心配ない」

全くもう、この子はどうしてこう可愛いのかね♪

ほんと、こういう時はルイズにそっくりだ。

ああ、もう、庇護欲を駆り立ててくれるな♪

抱きっ！

「な、何を?!」

「エヴァがあんまり可愛いからさ、ついつい庇護欲が！」

「……もう」

「さっきも言ったが、私は後悔などしていないさ。大丈夫、例え他の誰がエヴァを見捨てても俺は見捨てたりはしないさ。なんせ、大事な人だからね」

「……！ ば、ばか！」

「ははは！」

まあ、彼女に対して恋愛感情があるかといわれればまだわからんが、でも、彼女は間違いなくこの世界において俺の大事な人の一人だ。無論、チャチャゼロと茶々丸さんもだがな。なんというのか、エヴァは放っておけないんだよな。泣いてる子供みたいでさ……

「ヤルジャネエカ、あのご主人を口説くナンテヨ！」

「まあ、女性の扱いは慣れているからな」

「もう、タカシのバカ……」

「へへ、言うネエ。どうだ、一杯ヤラネエカ？」

「お、酒か、ならいいのがあるぞ」

「オ、ソウカ、ナラ俺も秘蔵のワインを出すぜ」

「ああ、では開けるとしようか、茶々丸さん」

「はい」

「グラスを用意してただけかな」

「はい、畏まりました、藤崎様」

「わ、私も飲むぞ！」

「ははは、じゃあ今日は皆で宴会だな！」

「イイネエ！」

どうも茶々丸さんは根っからのメイド気質のようで、名前では呼ん

でくれない。

まあ、彼女なりに敬意を払ってくれているのだろうし、無理に変えさせる必要もないか。

それに彼女ってどう見てもロボットだよな。

ふむ、それだけ科学が発達しているのか？

謎の多い学園だな。

……

……

あれから夜通し飲んでいたが、エヴァは途中でダウンしたので私とチャチャゼロでサシで飲んでいる。

エヴァは今は私の膝枕で寝ているがね……

私は色々な付き合いがてら飲む事が非常に多かったので、何時の間にもやら酒には強くなっていた。

まあ、あれだ、ジョゼフとギーシュと共に夜通し飲み歩いてたりしてたからな。

その後は、各人妻に怒られていたが……

しかし、チャチャゼロは本当に好きなのか、結構いい感じで飲んでいる。

チャチャゼロとは随分といい友人になれそうだな。

「シカシヨ、あのご主人がナア」

「ん？」

「タカシにや骨抜きだと思ッテヨ」

「まあ、可愛い女性ではあるな」

「……アレダ、ご主人の事ヨロシク頼むワ」

「どうしたよ、改まって」

「……ご主人に掛かってた呪いッテヨ、忘れラレチマウんだヨ」
「忘れられる？」

「アア……三年を過ギタラな、誰もご主人を覚エテネエンダ」

「……そうだったのか、辛かっただろうな」

「ダカラヨ、ご主人、ずっと笑ッテ無力ッタンダヨ」

「なるほどな」

つくづく腐っているな……やはり呪いを解いて正解だったようだ。

親しくなるうとも、全ての人が自分を忘れていく……それがどれほどの地獄か想像も出来んな……

そんな中で誹謗中傷に耐えながらよく生きていたものだ。

せめて、これからは楽しく生きてくれればいいんだがな。

「全く、チャチャゼロも主人思いだな」

「ソ、ソナンジャネエヨ」

「照れるな。まあ、エヴァの事は言われずとも面倒見るから心配するな。」

「ソウカ」

「勿論茶々丸の事もそうだし、チャチャゼロとはいい友人になれそうだしな」

「殺戮人形を友人って……タカシもぶっ飛ンダ奴ダナ」

「そうでもないさ」

「シカシヨ、正義バカ共が喧嘩売ッテ来るンジャネエノカ？」

「大丈夫、この家の周りは常に俺の使い魔が監視してるからな」

「ああ、ゾディアークとか言う奴力？」

「そうだ、あいつならこの学園なら一瞬でチリ一つ残さず消せるかな。なんせ、戒律王だからな。」

「戒律王？」

「神様によって成長を止められたのさ、あまりにも強力な力を持ちすぎた為にな。別名を天使王だ。」

「……ツクツクデタラメだな、お前は」

「自覚はしてるさ。まあ、そういう訳で正義バカ共が喧嘩売ってきても負けるつもりはないさ。それに精霊達も居る事だしな。」

「ああ、アイツラか」

「彼女達一人一人でも、この学園潰せるからな」

「……恐ロシイぜ」

「まあ、エヴァ達にちよつかい出せば、その瞬間に消すがね」

「……大人しそうな顔シテ、言う事ハエゲツ無いナ」

「当然だろう、大事な人だから……」

「ソウカヨ、まあ、俺としてはお前と殺し合いが出来ればソレデいいさ」

「せめて仕合と言え」

「イイジャネエカ、お前も楽しそうダシヨ」

「まあ、否定は出来んな」

そうなんだよなあ、本当にチャチャゼロと仕合しているときは楽しいんだよな。

お互い本物の刃物でやりあってるのに。
なんだろう、やっぱり義母上のバトルジャンキー癖が移ったのだろうか。

さて、明後日は学園長のところへ行って書類やらを受け取るだけか。それを受け取った後は、学園の警備の仕事か。
警備の方は適当にやれば問題ないだろう、あまり本腰を入れてやる

必要もない。

それにこれ以上力を見せて、下手に勘ぐられても面倒だ。

まあ、俺にとってはこの学園よりもエヴァ達の方が重要だからな。
今の内から、色々対策練っておかないとならん。

ああ、ほんと、正義バカは面倒だ。

2 時間目：妖怪現る！（後書き）

ちよつと後半チャチャゼロが多く出ました。

まあ、チャチャゼロって結構いい奴ですからね、作者はお気に入り
のキャラなのです。茶々丸もですけど。

それと、主人公の発言にある『大事な人』というのは、まだ『好き』
という感情ではありません。

どちらかといえば、友人や妹的な感じでしようね。

まあ、それが男女の恋愛に発展するように描きたいですけどね。

ではまた次回ノシ

3 時間目：警備員、藤崎充（前書き）

今回より警備員の仕事が始まります。主にチームを組むのはエヴァですが、別な人間と組む事もあるでしょう。では、3 時間目始まります。

3 時間目：警備員、藤崎充

先日の試験結果により、戸籍と身分証明書などが発行された。

戸籍上の名前は、『藤崎充』で変わらず。

住所はエヴァンジェリンの家となった。

まあ、彼女も承知してくれているし、チャチャゼロや茶々丸さんも歓迎してくれているので問題はなからう。

そして今日の夜から、警備員としての仕事が始まる。

組む相手としては……桜咲刹那とい子と龍宮真名という子らしい。

まあ、どちらも中学生らしいのだが……

なぜ中学生が警備員の仕事などをしているのか、はなはだ疑問ではあるが、まあ気にしたところでどうなるものでもあるまい。

エヴァは私と組みたいとごねていたが、まあ、初日でもあるからなあ、あまり我俣を言ってもしょうがないので、ここは自重するように説得しておいた。

あまり納得している感じではないがな……

一応彼女に妙な危害が加わらないように、精霊に頼んで護衛をして貰っている。

精霊に頼んでおけば、魔法を使われてもどうにでもなるからな。

エヴァからこの世界の魔法について詳しく聞いたところ、この世界では多くの場合精霊の力を自身の持つ魔力でもって制御し、魔法を行使するのだそうだ。

まあ、その際始動キーなるものと呪文が必要になるのが一般的のようではあるが……

とはいえ、精霊の力が源となるのであれば、その精霊の大本が力を

貸さなければ魔法は発動しないと言う事だ。
試しにエヴァに魔法を使つて貰い、精霊からの力の流れをアクア達に制御して貰ったところ魔法は不発に終わった。

まあ、中には影を使つた魔法などもあるため、一概には精霊だけではないのだが、多くの場合はこの方法で魔法を防ぐ事が可能だ。
しかし、中には魔力ではなく気を使い、技を行使する者もいるようだ。

先日対戦した高畑という人物がそれに該当するらしい。
とはいえ、私自身も気を扱う事はあるし、別段驚く事ではない。
気による技を防御する場合は、同じ量の気で相殺するか、または、より大きな気でもつて制圧するなどの方法があるが、まあ、多くの場合は後者だろうな。

相殺するには、気を上手くコントロールしなければならない。
どうも私が使う技は大味なモノが多く、細かい気のコントロールは苦手だ……

何れ折を見て、その辺りももっと修行せねばなるまいな。

「ナア、タカシ」

「どうした、チャチャゼロ」

「お前、今日から警備の仕事ダロ？」

「ああ、そうらしいな」

「大丈夫ナノカ？ 敵陣の真っ只中ダゼ？」

「問題はないさ、油断も慢心もするつもりはないからな」

「シカシヨオ……」

「まあ、心配してくれるのはわかるがな。とはいえ約定である以上破るわけにもいくまい。」

「律儀な奴ダナ、お前もヨ」

「性分だからな、仕方ない」

確かにチャチャゼロのいう通り、ある意味では敵陣の真っ只中なのだよな。

とはいえ、別段私の方から敵対するつもりはないがね。

まあ、相手が突っかかってくれればその限りではないのだが。

どうもエヴァが言うには、この相方の一人である桜咲という子はあの意味では正義バカ並みに厄介らしい。

というのも、彼女は学園長の孫の護衛を務めているようだが、彼女に対してある種の崇拜のようなものがあり、近づく者を片っ端から始末しているようだ。

となると、私の事を聞けば何かと突っかかってくる可能性はあるだろうな。

まあ、学園長の孫になど完璧に興味はないがね。

「タカシ」

「ん、ああ、エヴァか」

「……本当に警備の仕事行くのか？」

「推薦したのはエヴァだろうに……」

「そ、それはそうだが……」

「まあ、心配はいらんよ」

「でも……」

「やれやれ、エヴァは本当に心配性だな」

「うう……」

「大丈夫だ、チャチャゼロにも言ったが油断も慢心もするつもりはない。敵地の中だと思って行動する。」

「……気をつけてくれよ」

「ああ、エヴァもチャチャゼロもな。そういえば、茶々丸さんはど

うしたんだ？」

「今日は検診の日でな」

「なるほど、メンテナンスという訳か」

「ああ」

ふむ、そうだよな、幾ら発達した科学とはいえロボットである以上定期的なメンテナンスは必要だろう。

出来る事なら、彼女にも人間のような体を提供したいが……

「なあ、チャチャゼロ」

「アン？」

「もしもだ、人間のような体になれると言ったら、どうする？」

「ソリヤお前、ナツテミテヨ」

「ふむ……」

もしかしたら、スキルニルを応用すればいけるかもしれんな。

チャチャゼロの場合は、人形の体の中に魔道球なる入れ物が入っていて人格や記憶などはそこに保存されているようだ。

これをスキルニルの応用で作った人間そっくりな体に移植すれば恐らくいけるだろう。

茶々丸さんに関しては、今のボディをベースとして錬金術を使い表面を作り換えればいい。

関節などは別途作り直す必要があるだろうが、その部分さえクリア出来ればなんとかかなりそうだな。

出来る事なら、チャチャゼロにも茶々丸にも生きる楽しみを味わって欲しいからな。

「そうそう、エヴァ」

「なんだ？」

「約束しただろう？ 銀細工を贈ると」

「ああ……」

「出来たのでな、今の内に渡しておこうかと思ってな」

「も、もう出来たのか？」

「ああ、これ位なら容易い」

「そ、そうか」

「ほら、これだ」

「……ネツクレスカ」

「ああ」

「凄い細工だな……」

「まあ、半ば趣味のようなものだがな」

「これですか？ 売れば結構な値が付くぞ……まあ売るつもりは毛頭ないがな。ありがとう、大事にしよう。」

「そうしてくれ」

うむ、やはり自分で作った贈り物を相手が喜んでくれると嬉しいものだ。

エヴァは素材はいいからな、こういった物はよく映える。

「な、なあ、タカシ」

「ん？」

「これから少し出かけないか……」

「構わんぞ」

「そ、そうか、なら準備してくる！」

「アリヤ完璧にお前に骨抜きダナ」

「……やれやれ、この世界に来てまだ日が浅いのに守るものが出てしまったな」

「その割りに嬉シソウじゃネエカ」

「まあな、エヴァのような美人を守れるとなれば、男冥利に尽きるというものだ。まあ勿論、チャチャゼロや茶々丸さんも守る対象だがな、お前達は皆私にとっては身内のようなものだからな。」

「ソウカイ、まあ俺は守られるより攻メル方ダガナ！」
「だろうな」

……
……

その後はエヴァと買い物に出かけた。

まあ、今まで外に出られなかった事もあり、最近はよく出掛ける事があるようだ。

なにせエヴァほどの美人だからな、町でも評判のようだ。

だもんだから、どうも一緒に居ると居心地が悪いというか妙な視線を感じる。

ただの嫉妬なら構わんが、実害が出たら早急に対処せねばな。

ジー

「何をそんなにじっと見ているんだ？」

「あ、いや……」

「ああ、人形か、エヴァは好きなものな」

「こ、子供っぽいかな？」

「別にそうは思わんよ、可愛らしい趣味じゃないか」

そついやソフイーネも、可愛い物好きだったな。
特に猫が好きで、よくぬいぐるみとか集めてたな。

まあ、そういうときは顔真つ赤にして反論してたがな……

「ふむ、金はあるし買つてやろう」

「え？」

「すまない、表に飾つてあるぬいぐるみを貰えるか」

「はい、包装などはいかがしますか？」

「ん、そうだな、首にリボンでもつけてやってくれ、彼女に似合う色でな」

「はい」

昔のサイフに万冊が三枚ほど入っていたので、それを使って購入。
まあ、元々あまり金は使わないから、構わんだろう。

「はい、お待たせいたしました、どうぞ」

「ありがとうございます、お幾らだ？」

「放送代込みで、3・298円になります」

「そうか、ではこれを」

「はい、6・702円のお返しになります」

「ありがとうございます」

「またよろしく願います」

「ほら、エヴァ」

「あ、ありがとう……」

ふう、こうして男は女に貢いでいくのだよな。
やれやれ、本当に俺は女に甘いな……
まあ、しょうがないか。

……
……

その後も二人で色々と周り、警備の仕事の時間となったので集合場所へ向かった。

そこには数名の学生や教師と思しき者がいる。

何名かは、先日の試験のときにギャラリーとしていたのを覚えている。

まあ、どうもあまりいい感情は持たれていないようだがな。

「ここで暫くは待機か」

「ああ」

「しかし、これだけの人員を動員するとはな。余程大事な物があるのか。」

「まあ、学園長の孫が最優先だろうな」

「ふむ……」

「とはいえ、私達にはあまり関係ないがな」

「確かにな」

女子中学生の校舎に、一際大きい力の持ち主がいるからそれが孫なんだろう。

とはいえ、他の一般人からすれば非常に迷惑な話だな。

もしも巻き込まれてもしたら、怪我程度では済むはずはないしな。やれやれ、どうもこの世界も歪んでいるようだな。

「皆も知っての通り、今日より警備員として藤崎充殿が加わる」

「学園長、本当によろしいのですか？」

「そついう約束じゃからの」

「しかし！」

「私が気に食わないなら直接言ったらどうかね」

「う……」

はあ、直接言う度胸も無しか……

喧嘩を売るなら腹を据えてかかって来ればいいものを……

全く、最近の若い者は根性が無くていかな。な。

おつといかないかん、また爺癖が出てしまったな、自重せねば。

「まあ、各々意見はあるじやろうが、これはわしとの間での約定じや。勝手にたがえる事のないように、以上！」

「ではエヴァ、俺は指定の場所に向かう。気をつけてな。」

「タカシもな」

「チャチャゼロ、エヴァを頼むぞ」

「ケケケ、心配イラネエヨ」

「頼もしい限りだ、では、また後でな」

「ああ……」

さて、何が出るのやら……

どうもエヴァの話では召喚された鬼などが出るらしいが……

ふむ、鬼か…… 実際に見るのは初めてだな。

まあ召喚された存在なら、デイスベル・マジックを使えば直ぐに消せるだろう。

それに他にも幾らでも対処法はあるだろうし、問題はないだろうな。

……

……

ふむ、これが鬼か、思ったよりも大分弱いな。

これなら、デイスperl・マジックだけで事は済みそうだな。

『デイスperl!』

シュパアア……

「く、くそ!」

「あれが術者か……『ストップ』」

「ぐ、動けん!」

「悪いがお縄についていたどころ」

術者自体は身体能力は低いな。

これは、昔のメイジによく似ているタイプだな。

まあ、最近はメイジでも体を鍛えるのが主流になっているからな。

一昔前のメイジのように、ただ魔法を撃っているだけでは勝てない
事が多いからなあ。

「ふむ、この辺りは制圧したか」

「待て」

「ん? 君は確か……桜咲と言ったか、何か用事かね?」

「貴様、何者だ」

「ふむ、何者だといわれてもな」

「お嬢様に近づくつもりか」

ふむ、エヴァの言ったとおりだな。

この子はほとんど周りを見ていない。

自分と私の実力差がわかっているのかね。

「あゝ何か勘違いをしているようだが、そもそもそのお嬢様とは誰だ？」

「学園長のお孫さんだよ」

「ん？ 君は……」

「龍宮真名だよ、よろしく藤崎さん」

「ああ、今日の相方のもう一人か。して、なぜ私がそのお嬢様に関わらねばなんのだ？ はっきり言えば微塵も興味はないのだが。」

「嘘を付くな！」

スラッ！

「おい、桜咲、いい加減にしないか」

「黙れ、龍宮！」

「ふむ、抜いたか……それを抜くという事の意味はわかっているね」

「貴様ごときに！」

「やれやれ、少しお仕置きが必要だな。『加速』！」

「え?!」

トスッ！

「あ……」

ドサッ

「自分と相手の実力差もわからんようでは、剣士としては三流以下だな。で、君もやるのかね、龍宮君。」

「いや、とてもじゃないが貴方とやろうとは思わないよ」

「それが懸命だな」

「桜咲は？」

「なに、気絶しているだけだ」

「そうか、すまない、私の友人が粗相をして」

「構わんさ、若さ故の過ちといったところだろう。まあ、もう少し物事をしっかり見つめなおすべきだとは思うがね。でなければ彼女は、何れ取り返しの付かない事をしでかすだろう。」

「……肝に銘じておくよ」

「それがいい、しかしまあ、この世界の魔法使い関係者は皆こんな思考なのかね。これでは長くはないな。」

「……貴方はどうしてエヴァンジェリンと？」

「たまたまだな。まあ、彼女の事は気に入っているし身内と思っているよ。何よりも彼女は可愛い女性だしな。」

「さらっと気障な事を言うね」

「この程度、男として言えて当たり前さ。というかね、この程度を

気障なんて言わないで欲しいものだ。私の友人なんぞもつと凄いぞ」

「はは、そうかい」

「まあ、君も彼女もまだ若いんだ、無駄に命を捨てるような真似はしない事だな」

「……それは、貴方とエヴァンジェリンに手を出せば」

「ああ、問答無用で消す」

「……！」

「私にとっては、この学園を守る事に意味はない。私が守るべきは私の『大事な人達』だ。それ以外はどうでもいいのでな。」

「……それがエヴァンジェリンだと？」

「ああ、そうだ」

「しかし、彼女は吸血鬼だよ」

「それがどうかしたかね？」

「……貴方は吸血鬼を恐れないのか？」

「恐れる理由がない。そもそも彼女が君らに何かしたかね？」

「それは……」

「勝手に恐れて襲うから、彼女とて自己の生命を自己の安寧を守る為に戦わざるを得ないだけの話だ。私から言わせれば、正義を自称する魔法使いが愚か者にしか見えんよ。さて、おしゃべりは終わんだ、私は術者を所定の場所へ護送する、そちらのお嬢さんはお任せするよ。」

「……ああ」

「ではな」

やれやれ、少し長話をしすぎてしまったな。
やはり若い者相手だと、どうしても説教臭くなっていかな。
はあ、本当に年を食ったものだ……

……

………

その後は、特に問題も無く所定の時間となったため、警備任務初日は終了。

捕らえた術者を引き渡し、一路エヴァ宅へ帰還するのだが……
おかしい、エヴァの姿が見当たらん。

『タカシ！』

「テンペストか、どうした？」

『エヴァとチャチャゼロが襲われてる！』

「何？！ 場所は何処だ？！」

『こつち！』

クソ、一体誰だエヴァ達を襲っているのは！

どこの誰だか知らぬが、エヴァ達にかすり傷でも負わせてみる、確実に殺す！

……

………

「くっ！ 油断していたな、まさか本当に仕掛けて来るとはな……」

「どうスنداご主人、囲まれたぜ」

「対不死者用の結界か、それに……」

「魔法生物用の結界モダゼ」

「ああ、かなりキツイな」

よもやこんな真似をして来るとはな……

油断していた、これでは逃げる事も出来ん……

結界のせいで力も抑えられているな……これは不味いかもしれん。

「エヴァンジェリン、この場で貴様を断罪する！」

「はっ！ やれるものならやってみるがいい！」

「刻んでヤルゼエ！」

……

……

『見えた、あそこだよ！』

エヴァは……いた！

くそ、怪我をしているようだな、血が流れているのが見える。

それに、チャチャゼロも足を引きずっている……

これは急がねば！

『待つて、結界張つてあるよ！』

「邪魔だ！『ディスプレイ』！！」

パキイイイイン！

「エヴァ！ チャチャゼロ！」

「タ、タカシか、遅かったな……」

「オウ、助かったぜ……」

「二人とも大丈夫か？！」

「あ、ああ……私はなんとかな、しかしチャチャゼロが……」

「ナ、ナンテ事ネエヨ……」

「あ、足が切れているじゃないか！」

「あ、後で修復スレバ問題ネエ……」

な、何という事を！

どこの馬の骨か知らんが、俺の大事な人に手を出すとは……絶対に許さん！

「やはり来たか」

「……貴様らか、エヴァとチャチャゼロにこのような真似をした愚者は」

「貴様もこの場で断罪ス『黙れ！！』」

「よくもエヴァとチャチャゼロに怪我をさせてくれたな……貴様ら全員、命を捨てる覚悟は出来ているな……」

「……死ぬのは貴様の方だ、正義の鉄槌を受けよ！ 皆、かれ！」

『魔法の射手！！』
連弾・光の9矢！！
『

百の影槍！！』

『魔法の射手 火の三矢！！』

ふん、魔法で来るか……

ならば！

『マホステ！』

パキン！

ドドドドドッ！

「タ、タカシ！」
「オイ！」

シュウウウウ……

「やったか？」
「……それで終わりか？」
「な?!」

「全く、この程度の力で俺に挑むとはな、片腹痛い……さあ、今度
はこちらからだ！ 覚悟しろ、最早生き残れないと思え！」
「右手
からメラゾーマ、左手からベギラゴン……合体！ 閃熱大炎メゾラ
ゴン!!」
せんねつだいえん

ゴゴオオオオ！
……ブオオオオオオッ!!

「きゃあ！」

「ぐあ！」

「あ、熱い！」

「まだまだだ……『右手からマヒヤド、左手からバギクロス……合
体！ 氷刃乱舞マヒアロス！』」
ひょうじんらんぶ

バシッ！……バシッ！……バシッ！……バシッ！
……ババババババ！

「きゃ、きゃああああ……」

「があああああ……」

シューウウウウウ……

「ふん、大人しくなっただか」

「こ、殺したのか？」

「いや、一応威力は抑えた」

「あ、あれでか？ というか、見た事も無い呪文だな……」

「……相変わらずデタラメだな」

「さて、こいつらを拘束して……学園長のところへ乗り込むか」
「ど、どうするんだ？」

「何、こちらの要求を突きつけるまでだ」

「……そうか、しかしそれが通らなかったら」

「学園を消す……」

「ちょー！」

「エヴァとチャチャゼロに手を出したのだ、その程度は当然の報いだ」

「し、しかし！」

「まあ、一般人に危害を加えるつもりはないさ」

「そ、そうか……」

「じゃあ、行こうか、とその前にチャチャゼロは私の肩に乗れ、エヴァは……よっと！」

ヒョイ！

「ひゃあー！」

「悪いな、この方が運ぶのが楽なのでな」

「うう……」

「ご主人、顔が真っ赤ダゼ、ケケケ！」

「う、うるさい！」

さて、学園長はどう出るかな。

まあ、奴の差し金ではないと思うがな……

どうせ、このバカ共が暴走したのだろう。

とはいえ、部下の管理も上司の役目、それが出来ていないなら同罪だ。

さあ、お前の罪を数えろ！

……

……

■■■■■■■■■■ 学園長室 ■■■■■■■■■■

バンッ！

「な、何じゃ?!」

「学園長、少々話がある」

「ふ、藤崎殿か……と、な、何じゃそのけが人の山は!」

「この愚か者共がエヴァとチャチャゼロを襲った、これはどういう事だ? 納得のいく説明をしていたかどうか、近衛近右衛門!!」

「お、襲ったじゃと?!」

「ああ、おかげでエヴァもチャチャゼロも怪我をした。まあ、幸いにして私が駆けつけたのでな、大事には至らなかったが……しかし、襲った事に変わりはない」

「……な、なんちゅー事を」

この様子からすると、学園長は本当に知らないようだな。
やはり予想通りの暴走か……

全く、正義を自称する愚か者共は本当に始末に終えん……

「さあ、学園長、説明をしていただくのか」

「……すまぬ、わしも今回の件については何も知らぬのじゃ」

「ほう、ならば責任は無いと申すか?」

「いや、部下を抑えられなかったのはわしの失態じゃ、申し訳ない……」
「ならば処罰はどうするつもりだ……生半可な処罰では私は納得しないぞ」
「む、むう……」

冷凍刑にでもするべきかもしれんな、この阿呆共は……
エヴァがいくら不死者とはいえ、傷を負えば痛みはあるのだ。
それに、チャチャゼロとて体は人形とはいえ、傷をつけていいものではない。
それを複数人で闇討ちするなど……ガキの苛めと変わらんな。

「全く、正義を自称する連中がこの体たらくとはな」
「……」

「呆れて物も言えん。つくづく貴様らはクズだな。」
「弁解のしようもないわい……」

「とりあえずだ、肉体的には私の方で仕置きはしておいたがな、公的にはしっかり貴様の方で裁け。それと、二度とこの愚か者共の腐った面を私やエヴァの前に晒すな。」

「わかったわい……」

「それとだな、今回の事は随分と私の盟友である精霊達も憤慨しているのだな。何が起きても不思議ではない。努々忘れぬ事だ……。」

「肝に銘じておこつ……」
「ではな、学園長」

どうせ奴の事だなあなあで済ます事だろう。

まあいい、今度見かけたら確実に殺すだけだ。
しかし、ここまで正義バカ共が本当にバカだったとは……
実力差も考えずにこのような暴挙に出るとは……
これでは、この世界も先は長くないかもしれないな。

……
……

■ ■ ■ ■ ■ エヴァンジェリン宅 ■ ■ ■ ■ ■

さてと、家に戻った事だしエヴァとチャチャゼロの治療をしてから
風呂にでも入るか。

そういえば、茶々丸さんは……お、いたいた、戻って来ていたよう
だな。

「マスター、姉さん！」

「ああ、茶々丸さん、ただいま」

「あの藤崎様、マスター達に何が？」

「実はな……」

事の顛末を茶々丸さんにも話して聞かせた。

一応彼女も狙われる危険性があるからな、しっかり警戒するように
言っておかねば。

まあ、何かあれば私が真っ先に駆けつけるがな。

「しかし、正義バカ共は真性のバカだった訳か……」

「ああ、まさかあんな真似をするとはな。しかもあの結界、恐らく

本国から取り寄せた魔具によるものだろう……」

「キツカツタゼ、体が思うヨウ二動かネエンダカラヨ」

「対魔法生物用の結界もあつたからな」

「ふむ、その結界のせいでテンペストたちも手が出せなかった訳か」

「ああ、全く厄介な代物を持ち出してきたものだ……」

テンペスト達がついていながら、おかしいとは思つたがそれが理由か。

よもやそのような物があるとはな。

これは、家の周りの警備策を強化せねばなるまいな。

「全く、私の家族に手を出すとはな。余程命がいらぬと見えた……やはり消しておくべきだったかもしれんな。見せしめの為にも。」

「……タカシは人を殺す事に躊躇いはないのか？」

「そうだな、人を殺す事に躊躇が無いと言われてれば、躊躇いはあるだろう。だがな、家族や友人に手を出す輩に関してだけは一切の躊躇も微塵の後悔も無い。当然弱き民草に手を出すような外道な真似をする事は絶対に無いと誓える。それに、私自身は殺される覚悟はあるつもりだ。力を行使していいのは、殺す覚悟と殺される覚悟を持つ者だけだと、私は思うよ。」

「ふふ、そうだな。やはりタカシは私に近いようだ。誇りある悪にな」

「私にとつては正義も悪も無い。ただ、己の信念に従うのみだ。」

「そうか」

「イウジャネエカ、おい、景気付けに一杯ヤロウゼ」

「ふむ、いいな、戦いの後は酒で悪い気を洗い流すに限る」

「オツシャ！ 確か、ボルドーのイイヤツがアツタナ」

「チャチャゼロ、それは！」

「まあイイジャネエカご主人」

「ならば私も自前の酒を出そう」

「お、イイナ、タカシの酒は美味いカラナ」

「全く、こいつらは……」

「では、グラスを用意いたします」

「ふむ、そうだ、私がツマミを作ろう」

「料理が出来るのか？」

「ああ、趣味のようなものでな。結婚したての頃はよく妻達にせがまれて作っていたものだ。」

「そうか、楽しみだな」

こうして、エヴァ家の夜は更けていく。

しかし、あの阿呆共への対策も考えておかねば、いつ何時エヴァ達が危険に晒されるかわからんな。

全く、どうしてこつちも私の周りでは問題が起きるのだ。

たまには平穩に過ごさせて貰いたいものだ……切実に……

3 時間目：警備員、藤崎充（後書き）

今回はちとやり過ぎたかもしれませんが、正義バカを強調する為に、あえてガングロさんや高音に生贄になつてもらいました。

正直、あの辺のキャラ嫌いなんですよね。

まあ、3-Aもほとんど嫌いですし、好きなのはエヴァと茶々丸と千鶴くらいでしょうかね？

後はしるか先生は鉄板です、あの乳は（・・・）イイ！！

まあ、今後ヒロイン拡張の予定は今のところないですし、千鶴としるか先生は一般人ですからね、難しいと思います。

では、次の時間もまたヨロシクお願いします。

4 時間目：エヴァへの想い（前書き）

今回は臭すぎます！もう、ギップルと一緒に頑張って踊りだしたくないました！

完璧に原作から乖離しました。もう今更ですけどね！

エヴァの幸せの為、今日もタカシは頑張ります！

4時間目：エヴァへの想い

警備開始初日から、既に一ヶ月が経過した。

その後、学園長がエヴァの襲撃に関する首謀者、並びに、共犯者を連れて謝罪に来た。

エヴァ自身も許すと言っていた事もあり、学園長が次に同じ事が起されば自分が責任を取ると言い出したので、まあ、今回だけは学園長の顔を立てて許す事になった。

とはいえ、首謀者と共犯者は俺達の周囲に近づく事を禁じたがな。もしも許可無く近寄れば、問答無用で攻撃すると通達しておいた。奴らがいかにバカでも、もう俺達に手を出そうとはするまい。

その後は、特に問題もなく警備の仕事を続けていた。

時折学園長と話す事もあり、実年齢九十八歳の私としては一番年も近い事もあり、まあ今ではそれなりの付き合いをしている。

学園長自体は、生徒の事を考えているようだし、教育者としてみればオールド・オスマンと似たような考え方のようだ。

私の考え方や、子供達への教育方針などを話したところ、随分と共感したようだ。

まあ、私は常に自立を促す方向で教育をしてきたが、それが彼にとっては共感できる事のようにだ。

とはいえ、妻達には甘いといわれていたがな。

しかし、どうにも本国とやらが関係して来る為、彼自身なかなか思うように上手くいかない部分もあり悩んでいるようではあるが……

それと、あの高畑という人物が一週間前に復帰したそうだ。

なんでも、私との戦闘で全治三週間の怪我だったそうな。

ふむ、かなり適度に力は抜いておいたんだがな……

やはり、義母上と模擬戦しすぎていたせいかな、どうも感覚が狂って

いるようだな。

少し自重せねばなるまい。

まあ、あの高畑という人物も正義バカの一員ではあるが、他のよりは幾分かマシなようだ。

エヴァも彼だけは買っているようなので、抑え役になってくれる事を期待しよう。

さて、現在何をしているかというと、学園長に呼ばれたため、学園長室に来ている。

なぜ態々私達を呼び出したのか、気になるところではあるがな。

まあ、仕事関係だとは思うが。

「それで学園長、今日私達を呼び出した理由はなんだ？」

「うむ、それなんじゃがの……」

学園長の話では、どうやら三月よりサウザンドマスターとやらの息子が修行の為、この麻帆良学園に来るそうなのだ。

それも、教師として……

「それが私となんの関係があるのだ？」

「わしとしてはの、幾ら英雄の子とはいえ十歳の子供が教師をやれるとは思っておらんのだよ」

「まあ当然だな。そもそも修行の内容を決めたのは誰だ？」

「本国の上層部じゃよ」

「その子を二代目の英雄にでもするつもりか？」

「そうじゃろうな……」

「全く、本人の同意も得ずに将来を決めるとはな」

「それについてはわしも同意見じゃ。じゃが既に決まっちゃって
いる以上、受け入れない訳にはいかなくての……」

「そうだろうな」

「まあ、幾ら爺とはいえ面と向かって本国とは対立出来ないだろう
な」

「うむ、エヴァの言う通りでな、情けない事じゃが……」

学園長としても、どうやらあまり賛成ではないようだな。

まあ、当然と言えば当然だな。

いくらこの学園とはいえ、十歳の子供に教職が勤まる訳がない。
それだったら、難しい試験など必要ないだろうしな……

とはいえ、本国上層部の決定では逆らう事も難しいのだろう。

「して、学園長としては私に何を望むのだ」

「うむ、わしは貴殿に教職について貰いたいのじゃ」

「爺、貴様本気で言ってるのか？」

「無論本気じゃ。わしとしては藤崎殿の子供への教育方針にいたく
共感してのう。それに藤崎殿なら、あの子を『英雄の子』として見
る事もあるまいし、ありのままのあの子を見てくれると思ったのじ
ゃ。正直なところわしら魔法関係者では、どうしても『英雄の子』
という色眼鏡を通して見てしまふ。それではあの子の為にならんじ
やろうからな。」

ふむ、学園長も考えてはいるようだな。

まあ、確かに私なら英雄の子などという考え自体が無いからな。
教育するにはいい立場なのだろう。

とはいえ、私は魔法関係者とはほぼ対立状態にあるんだが、その辺
りはどうするつもりなのか。

「学園長の考えは理解した。確かに私なら余計な感情を持つ事はないな。とはいえ、私は学園の魔法関係者とはほぼ対立状態にあるのだが、その辺りはどうするつもりだ？」

「わしの方でなんとしても抑える」

「それが出来んから、前回のような事が起きたのだぞ？」

「そ、それを言われると辛いのじゃが……」

「私は反対だ。敵地のど真ん中だぞ。タカシに何かあつたら……。」「幾らあのバカ共とはいえ、一般教師の前では早々バカな事はせんだろう」

「そ、それはそうだが……」

「どうかのう、なんとか引き受けて貰えまいか？」

「私自身は構わぬが、エヴァが反対する以上は引き受けられんな」「のうエヴァ、ここはわしの顔を立てると思って承知してくれんか？」

「……なら、私も一緒にやる事が条件だ。タカシ一人を敵地などに送れんからな。」

「やれやれ、エヴァは本当に心配性だな」

「だ、だって……」

「ふふ、やっぱりエヴァは可愛いな。という訳だ学園長、エヴァと一緒にあれば承知しよう。」

「そ、そうか、やってくれるか。ならばエヴァも同時に教職に着かせよう。」

「それで、教科は何を担当するんだ？」

「藤崎殿は何が得意かのう？」

「ふむ、歴史などは得意だな。学生時代に叩き込まれたからな。」

「ならば藤崎殿は社会じゃな、エヴァは英語かのう」

「そつだろつな、その辺が妥当だろう」

「ふむ、では早速手続きじゃー！」

教職か、随分と久しぶりだな。

昔、魔法学院でコルベールさんと一緒に数ヶ月やった事があったな。あの時は色々と苦労したものだが、いい経験になった。

コルベールさんの教育方針を間近で見る事も出来たからな。

本当にあの人は尊敬出来る人だった。

亡くなったときは、何人も生徒が来ていたな……

「それと学園長、担当するクラスなどは決まっているのか？」

「うむ、元々エヴァが居た2・Aの担任をしていただけだよ」

「た、担任までか？」

「うむ、エヴァは副担任じゃな」

「というかな、元々エヴァが居たクラスなら覚えている人間もいるんじゃないか？」

「それなんだがなタカシ、どうも呪いが解けた時に私の事は記憶から排除されたらしい」

「何だと？」

「何時も卒業と同時に記憶から私の事は排除されていたからな、それと同じ事だろう」

「そうだったのか……」

「タカシが気に病む事じゃない、私は呪いから解放されて感謝しているからな」

「ならいいのだが」

「とはいえ、魔法関係者は私の事を知っている、口止めは必要だろう」

「それはわしがきつちりとやっておこう」

「で、何時から始めるんだ？」

「来週から早速始めて貰おうかの」

「わかった、資料などは後で送ってくれ」

「うむ、承知した、手続きなどはこちらで進めておく」
「ああ、任せる」

教師だけでなく担任も兼任とはな。

果たしてそこまでしていいのか疑問ではあるが、まあ、なんとかなるだろう。

それに私の教育は厳しいからな、今の子供らに耐えられるか……

悪い事をすれば問答無用で鉄拳が飛ぶからな。

まあ、2 - Aの生徒には覚悟して貰おう。

……
……

さて、教師をやるならばスーツなどは必要だな。
色々と買い揃えねばなるまい。

時間もあるし、エヴァと一緒に出かけるとしようか。

「エヴァ、少々出かけたいたのだが」

「ん、どうしたんだ？」

「教師をやるならスーツなども必要だろう？」

「ああ、そうだな」

「オ、出掛けるノカヨ」

「ああ、服などを買いいいな」

「ナラ、酒買つて来てクレヨ。日本酒ガ飲ミテエ」

「わかった、買って来よう」

「それじゃ、準備するから待っててくれ」

「ああ」

スーツは四着ほど購入するとして、後は筆記用具やノートなどの細かい品物だな。

あ、後力バンも必要だな。

元々持っていた物は、年代物だからな、結構ボロボロだ。

後は……何か必要な物はあるだろうか？

まあ、追々揃えていけば問題ないか。

「待たせたな」

「うむ、では行こうか。おっと、その服よく似合ってるぞ。」

「……あ、ありがとう」

「ふふ、では行こうか、レディ」

「ああ」

エヴァも本当に明るくなったな、きっとこれが彼女本来の姿なのだろう。

多少の問題はあったものの、やはり呪いを解いて正解だったな。

まあ、子供姿のエヴァも可愛いからいいのだがな。

なんというかこう、背伸びしている感じが微笑ましかったからな。

……

……

■■■■■商店街■■■■■

「タカシ、これなんかどうだ！」

「ああ、その色なら」

只今エヴァと共に私の服を選らんでいるのだが……やはり女性の買

い物は長いな。

カトレア達もそうだったが、私の服を選ぶのにえらい時間がかかるのだ。

古今東西、どこに行っても女性の趣向とやらは変わらんものだな。というか、先ほど選んだスーツは随分と高値だったぞ。

まあ、別段金はあるから構わんのだが。

「じゃあ、会計を済ませて来る」

「ああ」

「すまない店員さん、これを頂けるか」

「いらつしゃいませ、袖丈はどうされますか？」

「丁度良かったので、直す必要は無い」

「畏まりました、では全部で…… 146・600円になります」

「わかった」

ふむ、結構な値段だな。

警備員の仕事で結構な額を貰っているし、私自身別段金を使わないからいいんだが。

とはいえ、教師をやるなら身なりはしっかりしておかねばな。

「エヴァ、会計終わったぞ」

「そうか、じゃあ次は何処に行く？」

「そうだな、雑貨でも買い揃えようか」

「なら歩きながら見てみるか？」

「そうしよう」

「エヴァのスーツはどうする？」

「それも歩きながらだな」

「わかった」

私の買い物後はカバンや筆記用具などだからな、適当に歩きなが

から見ればいいか。

エヴァの服も、何かいい店があれば入ってみればいいだろう。
あいにくと、私は女性物の服には疎いからな。
何れ折を見て勉強しておくべきかもしれないな。

……

……

「ふむ、少々小腹が空いたな、そのカフェで休んでいくか」
「ああ」

しかしまあ、道行く人が皆してエヴァを見ていくな。
まあ、エヴァは美人だからそれも仕方ないのだから。
教職に着いたら、エヴァにも気をつけるように言っておかねば。
何が起きるかわからんからな。
さてと、注文もしたし少しゆっくりするとしようか。

「おや、藤崎さんじゃないか」

「ん？ ああ、龍宮君だったか」

「エヴァンジェリンとデートかい？」

「そんなところだ」

「デ、デートって訳じゃ……」

「男と連れ添って歩いていれば十分デートだろう、全くエヴァは本
当に可愛いな」

「か、からかうな！」

「ははは」

「全く、御熱い事だね」

「龍宮君は一人かね？」

「いや、クラスの友人と一緒にな」

「そうか」

「龍宮さん！」

「どうした、」

「いいお店見つけたよって……お知り合い？」

「ああ、ちよつとな」

「こんにちは元気なお嬢さん」

「あ、ど、どうも、初めまして」

随分と元気のいいお嬢さんだな。

それに、彼女自身多少の力を持っているようだ、まあ、本人は気が付いていないようだ。

それに後ろにいる三人もなかなかの才能を持っているようだ。これは将来が楽しみな子達だな。

「後ろのお嬢さん方も含めて座ったらどうかね、奢るよ」

「ならそうさせていたどころ」

「い、いいんですか？」

「ふふ、女性に対する礼儀というものだ、気にする事は無いよ」

「タカシ……」

「そうむくれるなエヴァ、まあ、たまにはいいだろうさ」

「もう……」

やれやれ、子供相手に嫉妬する事もなかりうに。

本当にエヴァはこういうところはエレンやルイズにそっくりだな。まあ、可愛いからいいのだがな。

「ありがとうございます！」

「ちょ、駄目だよ裕奈」

「藤崎さんがこう言ってるんだ、構わんだろう」

「ふふ、男の誘いを受けた事はないかね、お嬢さん」

「えと、その……」

「まあ、将来の為に男の扱いは覚えておいた方がいいぞ」

「はあ……」

こうして、龍宮君もあわせお嬢さん方としばしの歓談となったのだが……

まあ、エヴァが睨む事睨む事……

やれやれ、私がエヴァ以外の女性に靡く事はないと言つのにな。

第一彼女達では年が離れすぎているだろうに。

私から言わせれば、彼女達は孫と同じような年齢だからな。

愛情といっても、孫に対するようなものだ、男女の愛情を抱く事はないだろうさ。

「にしても、相変わらずだね、藤崎さんは」

「何がだ？」

「気障な事をさらつと言つてのける」

「そうかね、まあ、親友の影響だな」

「そういえば、えと藤崎さんでしたっけ？ そちらの方とお付き合いされてるんですか？」

「ぶっ！ わ、私とタカシが付き合っているだど？！ わ、私達はまだそんな関係じゃ……」

「えゝでもお似合いですよ」

「わ、私は……タカシと夫婦になりたいけど。でも……タカシは……」

「……」

「藤崎さんはどうなんですか？」

「ふむ……」

「……」

やはり女の子はこの手の話題が好きみたいだな。

しかし、この場で言うのはなあ。

流石に雰囲気というものが……

まあ、エヴァに対しては好意を抱いているのは間違いないが……

「その事に関してはここで言うべき事ではないな、やはり雰囲気というものの大事だ」

「……そうか」

「何れ答えは出さず」

「……ああ」

「えゝ聞きたゝいゝ」

「私もちよつと興味あるかも」

「こらこらお嬢さん達、あまり大人をからかうものではないぞ」

「えゝゝ」

やれやれ、賑やかな事だな。

その後も彼女達と歓談を続け、彼女達は時間と言う事でお開きとなった。

随分と元気のいいお嬢さんたちだったな。

まあ、エヴァがちよつと不機嫌だったがな。

……

……

……しかし、今回の事で思ったが、私もそろそろエヴァへの感情をはっきりさせるべきかもしれんな。

彼女は明らかに私に好意を抱いてくれている。

しかし私は今まで妻達の事もあり、はっきりと彼女への愛情を示し

た事が無い。

それでは彼女に失礼だ。

私自身は彼女となら夫婦になるのも悪くないと思っている。

ならば、しっかりと彼女への想いを伝えるのが男としての最低限の礼儀だな。

このまま放置しては、先代ヴァリエール家当主としての名が廃るというものだ。

それにきつと今頃天国にいるであろう妻達も、私の幸せを願ってくれるだろう。

また妻が増えたと呆れているかもしれんがな。

すまないな、カトレア達……君らの元へ行くのは大分遅くなりそう
だ。

だが、何れ私も行くだろう、その時はエヴァを紹介するから迎えて
あげてくれ……

「エヴァ、少し待っていてくれるか、少々買い忘れた」

「あ、ああ」

「すぐ戻る！」

さてと、エヴァへのプレゼントを用意するか。

カトレア達と同じように、錬金で指輪を作るとしよう。

宝石の色は……黒がよさそうだな。

夜を生きる彼女には似合っているだろう。

さ、急がねばな。

……

……

「すまない、待たせたな」

「ああ、買い忘れは何だったんだ？」

「何、教職で使う雑貨だよ」

「そうか」

「さて、少し散歩してから帰るか」

「そうだな」

……

……

■ ■ ■ ■ ■ 世界樹広場 ■ ■ ■ ■ ■

「何時見てもこの樹は見事だな」

「ああ、それに内包している力も凄い」

「そうだな」

さて、ここならば場所的にもいいだろう。

まあ、少々ギャラリーがいるのが気にはなるがいいかな。

「エヴァ」

「ん？」

「これを……」

「これは……指輪？」

「ああ、この際だからはっきりしようと思ってな」

「？」

「エヴァ、私と結婚してくれ」

「け、結婚？　タ、タカシと私が？！」

「ああ」

「ど、どうしてそんないきなり……」

「いきなりではないさ、私自身エヴァに好意があつたのは前からだ。ただ、妻達の事もあってなかなか踏ん切りがつかなかった。だが、今日あのお嬢さん達と話しているときのエヴァの言葉を聞いて、いい加減私もはつきりさせるべきだと思つたのだよ。」

「ほ、本気なのか？」

「無論本気だ、嘘や冗談で女性に想いを告げるほど酔狂ではない」

「……う、ぐすつ……う、嬉しい」

「そうか、ならばこの場で誓おう、私藤崎充はエヴァンジェリン・アタナシア・キティ・マクダウエルを『愛している』と」

「私も……藤崎充を……『あ、愛している……』」

「ふふ、これからも末永く共に歩もう」

「ああ！」

パチパチパチ！

「おめでとう！」

「うはゝマジのプロポーズだぜ！」

「いいなあ……」

「なんか素敵だなあ……」

「これは記事になるわね、早速書かないと！　とそうだ、あの！　ん？」

「新聞部の者です、出来ればお二人の事を記事にしたいのですが」
「構わんよ」

「ありがとうございます！　じゃ、何枚か写真取らせていただきますね。」

パシャ！
パシャ！
パシャ！

「出来れば後でその写真、回して欲しいのだが」

「はい。」

「じゃあ、住所はどこだ」

「ええ、お送りしますね。」

記事か、これは名が知れそうだな。
まあ、別に恥ずかしい事でも無いから構わんがな。
とはいえ、エヴァはそうでもないようだがな。」

「うう……は、恥ずかしい……」

「ははは、記事にまでなつては言い逃れ出来んな、愛しているよエヴァ」

「私も……タカシ」

そうして、お互いの唇が重なる……

その瞬間、周りから歓声が上がる。

やはり、男としてはこれくらいの演出はせねばな。
何せ一生物の思い出だ。

ふふ、これで晴れて私とエヴァは夫婦となる訳か。
カトリア達には申し訳ない気もするが、きっと許してくれるだろう。
彼女達は常に私の幸せを願っていてくれたからな。

まあ、私も彼女達への愛を忘れる事など無い。
きつと何時までも愛し続けるだろうな……

そして世界樹広場を後にし、家に戻った。

次の日に麻帆良新聞という、生徒が運営する新聞を読んだのだが一面に書かれていて載っている写真はあのキスの瞬間だった。

これを見たエヴァは顔を真っ赤にして倒れてしまった。

チャチャゼロは笑っていたし、茶々丸さんは祝福してくれた。

式などは何れ折を見て挙げる事にした。

まあ、吸血鬼が教会で祝福を受けるというのもなんだか妙な話ではあるがな。

やはり、私としてはエヴァのウェディングドレス姿は見たいからな。
エヴァは今からはりきって家事を覚えると、茶々丸さんに色々と習うようだ。

全く、本当に可愛いな。

……

……

■■■■■学園長室■■■■■

そうして、あれよと言う間に一週間が過ぎ教師として働く日がやって来た。

必要事項の確認の為、今は学園長室に来ている。

さて、これからどうなる事やら。

「記事を見たぞい、藤崎殿、いやはや目出度いのう」
「感謝する、学園長」

「しかしエヴァが嫁にのう……なんだか娘を嫁に出す気分じゃよ」
「ふふ、そうかもしれんな」

「藤崎殿、エヴァをよろしくお頼みいたしますぞ」

「言われるまでもない、エヴァの事はしっかり守り通そう」

「そうか、では、仕事の話を進めようかの」

「了解した」

いくら新婚とはいえ、しっかりと公私は分けねばならんからな。
何時までも浮ついた気持ちでは、生徒に舐められてしまう。
こういった職業は最初が肝心だ、ビシッとメなければな。

……

……

それから、学園長より二丁三の注意事項と説明を受け他の教員への
目通りの為職員室へやってきた。

「今日から働いて貰う、藤崎充先生とエヴァンジェリン・A・K・
マクダウエル先生じゃ」

「どうも、藤崎充です、若輩者ではありますが何卒よろしく願い
いたします」

「エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルです、夫共々よろしく
お願いします」

「藤崎先生には、2・Aの担任と歴史を、マクダウエル先生には2
・Aの副担任と英語を担当して貰う」

「どうも、学年主任の新田と申します、よろしく願いいたします
ぞ」

「はい、よろしく願いいたします」

新田先生か……この御仁はなかなかの人物のようだ。
何かあれば彼に教えを請うでしょう。

「して学園長、高畑先生はどうされるので？」

「うむ、高畑君は出張などでこれから学園を留守にする事が多くなるでな、担任を外れて貰うのじゃ」

「ふむ……引継ぎなどは？」

「済ませてあります」

「そうですね、わかりました。それと、2 - Aは何かと問題を起こしやすいですから」

「ええ、その点のご心配には及びません。×るところはしっかりと×させて頂きます」

「そうですね、それを聞いて安心いたしました」

「ではそろそろHRの時間じゃ、向かうとするかの」

「わかりました、マクダウェル先生、行きましようか」

「ええ、藤崎先生」

エヴァと話し合った結果、学校内では苗字で呼び合う事にした。
公私を分けるためにも、これくらいの配慮は必要だ。
さて、どんなクラスなのやら……

……

……

■ ■ ■ ■ ■ 2 - A ■ ■ ■ ■ ■

「今日から新しい先生だっけ？」

「そうそう、なんか若い夫婦らしいよ！」

「えゝそうなんだ」

ザワザワ……

「ここじゃ」

「ふむ……いきなり罨が仕掛けられていますね」

「そうですね、中にも罨があるようです」

「どうやら、聞きしに勝るほど元気がいいようです」

「ふおおおお、そうじゃの、2・Aの子達は元気がありあまってるからの」

「じゃあ、ここはビシッとめるとしましょう」

ガラッ！

落ちてきた黒板消しを受け止め、張つてあるロープを解除し、バケツを脇においてと……

全く、今時こんな古典的な罨に引っかかる奴はいないだろうに。何を考えてるのやら。

「皆席に座りなさい」

ガタッ

「今日より2・Aの担任を務めて貰う藤崎先生じゃ」

「藤崎だ、今の罨を仕掛けた者は明日までに反省文を書く事。なお、サボれば罰として一週間の掃除を命じる」

「え〜！」

バンツ！

「悪いが私は高畑先生のように甘くは無い、ビシバシ躰けるからそのつもりでな」

「は、はい……」

「ふおふおふお、のっけから飛ばすのう、それと副担任のマクダウエル先生じゃ」

「よろしく」

「きゃ〜綺麗！」

「ちなみにお二人は夫婦じゃ、知ってる者もおると思うがの」

「あの記事に載ってた人だ！」

「そうだよ、あの世界樹広場でプロポーズしたっていう！」

「きゃ〜！！！」

全く、本当にこういった話になると女の子は喧しいな。

やれやれ、これは大変なクラスを受け持ったかもしれんな。

「あゝ静かに、藤崎先生には歴史を、マクダウエル先生には英語を担当して貰う」

「あの、高畑先生は？」

「高畑先生は出張などで学園を留守にする事が多いでな、担任から外れて貰ったのじゃよ」

「そ、そうですか……」

「まあ安心しろ、私は勉強の出来る出来ないで差別などをするつもりは一切ない。ただ、躰けには厳しいからそのつもりでな」

「私も同じです」

「まあ、これから仲良くしてくれ、妻共々な」

「」「」「はぁ」「」「」「」

「それと、反省文は忘れないようにな」

「えゝ！」

「ふふふ、面白い子達ですね」

「そうですね」

元気が有り余ってるのは確かだな。

まあ、これ位元気がある方が子供らしくていいのだがな。

さて、これから頑張るとしようかね。

「では、HRは藤崎先生とマクダウェル先生への質問の時間に当てると良いじゃろう」

「わかりました」

「ええ」

「では、わしは戻るとする。何かあれば学園長室へ来てくれ。」

「了解いたしました」

さて、質問か……何が来るやらな。

まあ、大体予想は出来るかな。

「はいはい、じゃあ、質問はこの報道部所属の『朝倉和美』が務めまゝす！」

「ああ、任せよう」

「じゃあまず、藤崎先生から、名前、年齢、出身、趣味などを！」

「名前は藤崎充、出身は神奈川県、年齢は二十五歳、趣味は料理や細工作りだな」

「どうも〜では次にマクダウエル先生！」

「名前はエヴァンジェリン・A・K・マクダウエル、出身はイギリス、年齢は二十二歳、趣味はお茶などですね」

「ありがとうございます！ では次に、皆気になるであろうあの記事について！」

「そうそう、だってキスシーンだもんね！」

「あれ、本当なのかどうかでネットの掲示板でも噂になってた」

「やっぱりそれか…… まあ気にはなるだろうな。」

「とはいえ、流石にあの場でのキスはやり過ぎたか？」

「まあ、雰囲気というモノがあるからな。」

「エヴァは戻ってからというものの放心していたがな」

「事実だ。私がエヴァに告白したんだよ。」

「その内容は？！」

「何、別段気取った台詞でもないさ、ただ一言、『愛している』と言っただけさ」

「きゃ〜」

「い、いや、十分気障っすよそれ……」

「いいなあ、私もそんな事言われてみたいわあ」

「やっぱり大人は言う事が違うなあ」

「タ、タカシ…… は、恥ずかしい……」

「ふふ、まあ、帰った後エヴァは放心していたがね」

「も、もう、言わないでっ！」

「ははは」

「なんていうか、藤崎先生って余裕ありますね」

「こっ見えて色々と経験は豊富だからな。勉強だけでなく恋愛の相

談も可能だぞ、付き合った女性はそれなりにいるからな」

「うはゝ余裕ある発言！」

「ね、妬ましい……」

「まあ、大概の男は胃袋から落とす事だ。後は内面だな、外面だけ取り繕ってもいい女にはなれん、男を受け止める事の出来る女になる事だ」

「うはゝなんか凄い重みのあるお言葉……」

「ほんと、なんか二十五歳には見えない……」

「そ、そうだね」

「ふふ、よく言われるよ、さてではHRもそろそろお終いだ、授業の準備をしておきなさい」

「……はい」

「一時間目は数学だったな、では、授業頑張りなさい」

ガラッ！

「やれやれ、本当に元気の有り余っている子達だな」

「そうだな」

「まあ、退屈はしなそうではあるが」

「している暇は無さそうだな」

「ああ」

これからこのクラスを引っ張っていく訳か……

それに何れはサウンドマスターとやらの息子がここに来るのだっ
たな。

まあ、恐らく担任などではなく、教育実習のような形態を取るのだ
ろう。

流石に幾らなんでも十歳の子供に担任は無理だ。

新田先生あたりが黙っていないだろうからな。

それまでに私も色々と準備しておくべきかな。

さて、頑張るといたしますかね！

4 時間目：エヴァへの想い（後書き）

やばいつす、やり過ぎたつす！

何だか書いてる内に、勝手にこのような話に……まあ、教師にしないと野菜君の躰けも出来ないですから致し方ないのですけどね。

エヴァへの告白はどうしようか迷ったのですが、ズルズル引っ張つてもあれですしここらで一発決めておこうかと思ひまして、こうなりました。

どちらにしろ、何れやる予定でしたし、野菜君の登場前にやっておいたほうが何かと都合もいいですからね。

今後は舞台の中心は2・Aを中心とします。とはいえ、主人公は変わらずタカシですけどね。最初にスポットを当てるのは、我らがちうたんです。

彼女は色々辛い立場ですからね、早めに救済します。

後、千鶴さんもどうしようか迷ってます、なんせあの乳ですから見逃すのは……

後しずな先生ですね、彼女も次の話で登場し、原作とは違いメインキャラを張る事になります。まあ、どういった形になるかは秘密ですけど。

では、また次の時間でお会いしましょうーノシ

5 時間目：教師としての日常（前書き）

はい、今回は教師としての日常です。まあ、なかなか難しい部分なんですけどね。学校内での口調の変化やらなんやら……もう頭狂いそうです。

では、どうぞー

5 時間目：教師としての日常

教師となつてから、既に一週間が経過した。

その間、生徒達とは結構仲良くなれたと思う。

まあ、一部の魔法関係者を除いてだが。

特にあの桜咲とやらは随分と私を敵視しているようだ。

全く、私は近衛に興味など無いのだがな。

それと、あの正義バカ共の事だが私とエヴァが教師になる事にやはりというか反対したようだ。

曰く「吸血鬼などに任せておけない」「人殺しに教師など務まらない」「子供が悪の道に引き込まれる」だそうだ。

……やれやれ、本当に呆れて何も言う気も起きんな。

私もエヴァも確かに人を殺した事はあるが、それもやむない事情があつての事。

言われるまでも無く、自分自身でそれが罪だと自覚している。

である以上、子供達に私やエヴァのような道を歩ませる事などするはずも無い。

そもそも、子供を正しく導く事こそが大人の役目。

それもただ一方的な見方で物事を教えるだけでなく、しっかりと裏と表の判断や多角的視野で物事を判断出来るようにするのが教育というもの。

私が目指す教育は将来にわたり、自分自身で物事を考えられる真に自立した大人とする事だ。

あの正義バカ共の偏った教育を受けたらそれこそ将来駄目になるだろう。

そう言つて怒鳴りつけてやったところ、小うるさい連中は大人しく

なっただがね。

やれやれ、先が思いやられるな。

「藤崎先生」

「新田先生、何か御用ですか？」

「いえ、どうですか、あのクラスは」

「ええ、元気が有り余っているようです。まあ、いい子達ですよ。」

「そうですか、とはいえ些か規律が乱れておりますからな」

「ええ、確かに仰る通りですね。いくら自由な校風とはいえ、やるべきところはやるべきでしょう。まあ、悪戯をした場合などはしっかりとしておりますからご心配には及びませんよ。」

「そうですか、それを聞いて安心いたしましたよ。高畑先生は悪い先生では無いのですが、少々生徒に甘いですからな。」

「甘さも必要でしょうが、それも度を過ぎては問題ですからね。褒めるべきところは褒め、叱るべきところは叱る、子供の教育上当然の事ですね。」

「そうですな、いや藤崎先生はお若いのにしっかりしておりますな」

「いえ、私などまだまだ若輩者です。新田先生のような方こそ、私としては教師の手本だと思っておりますよ。」

「ははは、褒められると照れますな」

「ふふ、私としては新田先生は尊敬に値する方だと思っております。これからよろしく願います。」

「ええ、こちらこそ。では私は用事がありますのでこれで。」
「はい」

この新田先生は、生徒の間じゃ鬼の新田と言われているようではあるが、このような方こそ教育の現場には必要なんだと思う。確かに怖いかもしれないが、それも全て生徒を思えばこそ。自ら憎まれ役となっているのだ。

あの正義バカ共にも、この方の考え方を少しは見習って貰いたいものだ。

「藤崎先生」

「源先生、どうされました？」

「はい、これを」

「……ああ、この間のテストの結果ですか、態々どうも」

「いえ、それでは私はこれで」

「はい、どうもありがとうございます」

ふむ、源先生か、彼女もいい先生ではあるな。
しかし、どうも彼女からは妙な感覚を受ける。
なんというか、エヴァに近い感覚だ。

こう、人間とはどこか異質な感じがするのだよな。
まあ、彼女もこの学園に勤めている以上、何かあるのかもしれない。
私から聞き出す事では無いだろうが、何れは確認せねばなるまい。

……
……

今日の授業も順調。

まあ、バカレンジャーなる五人組は相変わらずだな。

とはいえ、あの五人も最近は少しずつ勉強を頑張っているようだ。苦手なのは構わんし、嫌いなのも構わんが、やはり勉強はしておくべきだからな。

どんな無駄に思える事でも、いつかそれが役立つときが来るものだ。そのため、今度の期末試験は少々楽しみではある。彼女達も頑張ってくれると嬉しいがな。

「藤崎先生」

「マクダウエル先生、どうしました」

「いえ、授業の事なんですけど」

そうしてエヴァと授業の事で少々話し込んでいたところ……

「……あの、藤崎先生、マクダウエル先生」

「ん？ ああ、長谷川か、どうしたね」

「ちよつとお二人にお話しが……」

随分と深刻そうだな。

何かあったのだろうか。

「ふむ、なら生徒指導室で話を聞こう」

「はい……」

酷い落ち込みようだな。

教師になってから一週間、クラスの様子を見ていたが、どうも彼女はクラスでも浮いているからようなのだよな。

なんというか、人を避けている感じがしてならん。

まあ、気になっていたので何時かは話をしてみようとは思っていた

ので丁度いい。

悩みがあるのならばそれを解決するのもまた教師であり大人である私の役目。

出来る限り力になってやらねば。

……

……

■■■■■生徒指導室■■■■■

「さて、話という事だが」

「何かあったの？」

「あの……」

「まあ、ゆっくり話さない、別段あわてる必要はない」

「はい……実は……」

そうして途切れ途切れに切り出した話の内容だが、彼女は自分が異常では無いかと悩んでいるらしい。

というのも、この麻帆良では通常あり得ない事でも、「麻帆良だから」で済まされてしまい、明らかに異常であっても誰もそれを認識しない。

よって、自分が正常なのか異常なのか判断がつかなくなったようだ。加えてそれを誰かに言っても、誰も信じてくれない……

そいつった状況が延々と続いた為、今では誰とも付き合わず部屋に籠っているらしい。

これは、ある種の間人不信のようだな。

このままでは彼女は何れは心が壊れてしまう。

全く、この教師共は一体全体何を見ていたんだ……

高畑も担任をしていたのなら、先ずはこういった子を救うべきだろうに。

はぁ…… 本当に、情けない。

「なるほど、君の話はよくわかった」

「……ここにも犠牲者がいたのね」

「せ、先生達は私の言う事信じてくれるんですか」

「当たり前だ、生徒の言葉を信じずしてなんの教師か。確かに君の言う通りこの麻帆良学園は一般的な見方をすれば異常だ。ただ、どうもそれを異常と思わせないような仕掛けがあるようだ……とはいえ、君は間違はなく『正常』だ。決して異常ではない。この私が保証しよう。」

「ええ、私も勿論信じるわ。貴女の顔を見れば嘘を言っていると思えるはずがないわ」

「……よ、良かった……ぐす……信じて貰えて……私……」

「泣きたければ好きなだけ泣きなさい、誰も咎めはしないよ」

「そうよ、泣きたいときに泣いておかないと、心が破裂するわ」

「う、うう……うああああああああ……！」

それから約十分ほど彼女は泣き続けた。

余程溜まっていたのだろう、顔をくしゃくしゃにして泣いていた。まさか生徒にまで犠牲者がいたとはな……やれやれ。

私ももつと早くにこの子に接するべきだった。

まだまだ私も未熟だな。

「落ち着いたかね」

「はい……すみません……」

「謝る事じゃないわ」

「そうだぞ、むしろ君がこうして私達二人を信頼して話してくれた事を嬉しく思うよ」

「ええ、そうね」

「ありがとうございます、おかげですつきりました」

「ふふ、前よりいい顔になったわね」

「確かにな♪」

それから少し話しをして、彼女には自分自身に自信を持つ事、眼鏡を外して素顔のまま堂々としている事、少しずつでもいい、積極的にクラスに溶け込む努力をする事、何かあれば直ぐに私がエヴァに相談する事を伝え部屋に戻した。

しかし、この事は学園長にも報告しておかねばなるまい。

これは、気が付かなかった教師全員の責任だ。

危うく生徒一人の心を壊すところだったんだからな。

「さてと、学園長にこの事を報告するか」

「ああ、そうだな」

……

……

■■■■■学園長室■■■■■

「学園長、藤崎、マクダウェルです」

「おお、入りなされ」

「失礼します」

「失礼する」

む、高畑もいるのか、丁度いい、奴にも説教しておこう。
教師にあるまじき事をしていたのだからな。

「どうしたのじゃな」

「ええ、少々お話があります、高畑先生もよろしいか」

「あ、はい」

さてと、彼女の事を話して二人がどうでるかだが。
もしもふざけた事を抜かすようなら、仕置きせねばなるまいな。

「話というのは我がクラスの『長谷川千雨』についてですが……高畑先生、貴方は担任として何をしていたのですか？」

「え？」

「彼女は麻帆良の異常性と自分の持つ常識との間で苦しみ、下手をすれば心が壊れる寸前だったのですよ？」

「……それはどういう事かね？」

「先ほど彼女自身から相談を受けました。内容としては………と
いう事です。」

「むう………そのような事が」

やはり気が付いていなかったか……

ここはきつちりと二人に言い含めておくべきだろう。
今後の生徒達の為にもな。

「高畑先生！」

「は、はい！」

「貴方は教師でしょう、ならば何故苦しんでいる生徒を放置するよ
うな真似をしたのです！」

「そ、それは……」

「気が付かなかったですか？　それで教師が務まるか、ばか者！！」
「も、申し訳ありません！」

「いいか、彼女はすでに人間不信にまで陥っていたのだぞ！　あの
ままの状態で成長すれば彼女は一生人間を信用出来ずに過ごす事に
もなりかねなかったのだ。そのような生徒を貴方は教師でありなが
ら、危うく見殺しにするとところだったのだぞ、恥を知れ！！！」

「は、はい！」

「学園長、貴方もだ。学園の長であるならば、そういった生徒は何
を置いても救うべきだろう。」

「……お主の言う通りじゃ、我が事ながら情けない」

「もう二度と彼女のような生徒を放置しないように。いいですね！
！」

「うむ」

「はい、僕も、自分の教育を見つめなおします」

やれやれ、まあこの二人ならば大丈夫だろう。

もう彼女のように苦しむ生徒が出ることはないだろう。

とはいえ、やはりこの学園だからな、油断は出来ないが。

「幸い彼女はこれからは少しずつではあるが、周囲とも上手くやつ
ていける事でしょう。勿論私とエヴァも彼女がの為ならばどのよう
な努力も協力も惜しむつもりはありません。」

「ああ、あの子は私と同じ魔法の犠牲者だしな、放ってはおけない」

エヴァも彼女の境遇には同情しているようだな。

ある意味では、エヴァと似通っているからな、長谷川は。

まあ、エヴァも女性であるからな、今後は色々と相談にも乗れる事だろう。

「わしも出来うる限りの事をしよう」

「僕も出来る事があるならば」

「ならば、彼女を守ってあげなさい。彼女がしっかりと自立し立派な大人になれるまで。」

「そうじゃの、それこそ教師の努めじゃしの。しかし、やはりわしの目に狂いは無かったのう、藤崎殿を教師にして正解じゃったわ。」

「僕もまだまだ未熟者だと思い知りました」

学園長も生徒の事を考える人ではあるし、まあ、これだけ広い学園だ、隅々まで目が行き届かないのは致し方ないだろう。

高畑も己の非を認める事の出来る人間だ。

ならば、正義バカ共のような間違いを犯す事はあるまい。

これからは、いい教師となってくれるだろう。

「では私達はこれで失礼する」

「ああ、そうだな」

「うむ、また何かあれば報告してくれ」

「そうさせていただこう、ではな」

パタン……

「凄い剣幕じゃったの」

「え、ええ、思わず腰が引きましたよ」

「しかし、それだけ生徒の事を思っていていてくれるようじゃ」

「はい、僕も見習わなければいけませんね」

「うむ、他の魔法先生も彼の素晴らしさをわかってくれればよいが
の」

「そうですね」

……

……

さてと、今日の授業は終わった事だし、家に戻って明日の準備でも
するでしょうか。

「藤崎先生」

「新田先生、どうされました？」

「いえ、仕事が片付きましたら皆で食事をしようと思いましたが」

「そうですね」

「どうですか、藤崎先生も一緒に」

「申し訳ないのですが、私は家族が待つておりますから」

「そうですね、そういえば新婚でしたな、これは失礼を」

「いえ、誘っていただき感謝いたします」

「ええ、機会があれば飲みにでもいきましよう」

「はい、その際は是非」

チャチャゼロや茶々丸さんを放って置く訳にもいかなからな。
新田先生には悪いが、今回は辞退させていただきます。

まあ、魔法先生もいるようだし、私がいては酒が不味くなるだろうしな。

とはいえ、何れ新田先生とはサシで飲んでみたいものだな。さてと、そろそろエヴァを迎えに行くとするか。確か資料室にいてと言っていたな。

……

……

■■■■■■■■■■資料室■■■■■■■■■■

「エヴァ、迎えに来たぞ」

「ああ、ちよつと待って」

どうしたんだろうか、誰かいるのか？
生徒と話してるのか？

「いいわよ」

「ああ……と、和泉だったのか」

「あ、すみまへん、藤崎先生」

「いや構わんが、どうしたんだ？」

「ちよつとね……」

「女同士での相談事という事ですか、なら男の私が口を出す事ではないですね」

「すみまへん」

「なに、謝る事ではない」

「和泉、藤崎先生にも話してみたらどう？」

「……で、でも」

「まあまあマクダウエル先生、無理に話させる必要はないですよ」
「……それもそうね、ごめんなさいね和泉さん、今のは忘れて頂戴」
「いえ、こちらこそすみまへん……」

ふむ、何か重要な相談事か……恋愛絡みかな？

まあ、やはり女性であるエヴァの方がそういった話はしやすいだろう。

和泉自身が自分から話してくれるまで、無理に聞く必要はないな。

「それじゃマクダウエル先生、うち戻りますね」

「ええ、また何かあれば言って頂戴ね」

「ありがとうございます、藤崎先生も失礼します」

「ああ、気をつけてな」

パタン……

「ふむ、随分と先生らしくなってきたなエヴァも」

「茶化すな、和泉の相談は割りと深刻だ」

「ふむ、そうなのか」

「まあ、男には言えない悩みではあるな」

「そうだろうな、あの年頃の娘ならそういう事も多いだろうからな」

やはり、中学生ともなると悩み多き年頃といったところか。

私もそうだったからな、色々悩んだものだ。

まあ、悩めば悩むほどいい経験になるからな。

今は大いに悩む事だ。

「それでは、帰るとするか」

「ああ、そうだな」

ふう、今日は色々と厄介な事が多かったな。
学園の正義バカ共は、教師を気取ってはいるが根本的に教師として
欠落している部分が多すぎる。
これは一度、新田先生など古くから教職にいる方々を交えて徹底的
に再教育すべきかもしれん。
そうでなければ、生徒達の中に長谷川のような犠牲者が何時また何
時増えるかわからんからな。

……

……………

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼エヴァ宅▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

漸く帰ってこれたか。

やはりここにいるときが一番落ち着くな。

「ヨウ、戻ったノカヨ」

「ああ、チャチャゼロ、ただいま」

「お帰りなさいませ、藤崎様、マスター」

「ああ、戻ったぞ」

「茶々丸さん、申し訳ないが茶を一杯いただけるか」

「はい、畏まりました」

「ナンダヨ、酒でイイジャネエカ」

「今は茶が飲みたいんだ、酒は食後にしてくれ」

「チエ」

全く、お前は飲んだくれの親父か？
もう少し自重といモノを覚えてもらいたいものだな。

まあ、結局付き合う私も私なのだがな。

「ソウイヤ、タカシよう」

「ん、どうした？」

「前に人間二ナリタクナイカとか言ってたジャネエカ、あれ、ドウナッタンダ？」

「ああ、あれか、出来るぞ」

「ブッ！ 出来ルノカヨ！」

「割と簡単だからな」

「オメエは本当にデタラメダナ……」

「何、あるマジックアイテムを素体とするだけだ。チャチャゼロが望むなら作るが？」

「……ソウダナ、面白ソウダシナ、頼ムゼ」

「わかった、では近日中に仕上げよう。序といってはなんだが、茶々丸さんもどうだ、見た目を人間のようにする事が出来るが。」

「え、ええと……」

「あくまで外見だけだな」

「マスター……」

「お前の望むようにするといい、私は別に強制はしない」

まあ、肌を変えるのは女性にとっては重大事だからな。

悩むのも無理はないか。

「……では、その……お願いいたします」

「わかった、チャチャゼロの体が完成したら同時に行つとしよう。二人共美人に仕上げるとするよ。」

「はい」

「ヨロシク頼むぜ」

茶々丸さんも女性だからな、やはり見た目が機械的な感じよりもより女性に近い方がいいだろう。

彼女も中身が機械とはいえ、しっかりと『生きている』のだからな。

チャチャゼロはあれだな、恐らく人間に近い方が戦いやすいといったところか。

今の人形のままでなかなか味があるんだがな。

まあ、彼女自身が希望している事だからな、私も全力で取り組むでしょう。

……

……

それから夕食を取った後は、毎度の如くチャチャゼロと飲んでいたのだが、エヴァは相も変わらず撃沈。

やれやれ、可愛い顔して寝ているものだ。

「シカシヨオ」

「どうした、チャチャゼロ」

「イヤヨ、マサカご主人が教師ヤルナンテヨ」

「まあ、そうだな」

「昔じゃ考エラレネエヨ」

「エヴァもいい意味で変わったからな」

「才前のセイダロウヨ」

「そうかね？」

「アア、ご主人が日に日に女にナツテクノガヨクワカルゼ」

「いい事じゃないか」
「マアナ」

元々エヴァは女性としてはかなり出来上がっていた感じだったからな。

それがここ最近はより女性らしくなったというか……まあ、いい傾向だな。

まあ少々子供っぽいところはあるのだが、それもまあ彼女の魅力ではあるな。

酔うと本当に手間がかかるがな……ふふ

「私はそろそろ休むとする、明日も早いのでな」

「ソウカヨ、ンジャ俺も戻るぜ」

「ああ、お休み」

「オウ」

明日は授業は2 - Aだけか。

ならば、多少時間に余裕もあるだろうし、早めに帰ってチャチャゼ口の体を作る作業でもするでしょう。

材料の調達については問題なかつ。

実際に質感を人間に近づけるなら、普通に売っている材料で賄えるだろうからな。

中枢となる部分は既にチャチャゼロの中にある訳だしな。

となれば、モデルの方を考えねばなるまい。

やはり、チャチャゼロとするならば……十四歳から十六歳くらいが丁度いいかもしれんな。

ならば、何かしら写真などがあれば作りやすいのだが……雑誌でも買すべきかな。

まあ、デザインに関してはチャチャゼロとも相談するでしょう。
何せ彼女の体だからな。

と、考え込んでいたら結構な時間だな、そろそろ休まねば。
明日も頑張るとしよう。

5 時間目：教師としての日常（後書き）

というわけで、今回は早々に長谷川千雨嬢を救済いたしました。

彼女は早めにやっとかないと、色々大変ですからね。

それと、しずな先生にも微妙なフラグが立ちました。

彼女の生い立ちとかその辺りは、本作独自設定に基づく予定です。

まあ、どうなるかはまだ先の話ですけどね。

そいでは！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3148s/>

オタリーマンのネギま！生活

2011年5月1日21時52分発行